
魔法少女リリカルなのはStrikerS ~ 煌きの幻想 ~

鐘

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはStrikers 　　く煌きの幻想く

【Nコード】

N3142M

【作者名】

鐘

【あらすじ】

事故によって死んでしまった少年神童焰真。神様の気分からとある世界に転生する・・・その世界はリリカルなのはの世界だった・・・。
文才の無い作者が原作崩壊キャラ崩壊有りのダメダメ駄文ファンタジーこういうのが苦手な人は
回れ右をお願いします><出来る限り頑張ろうと思います。よくあるチート系物語ですがよろしくお願いします。

キャラクター紹介（前書き）

主人公&デバイス達の紹介です。

神童焰真 カオス エデン の紹介

主人公達チート系ですw

キャラクター紹介

〓 主人公&デバイス紹介〓

神童焰真 17歳 184cm 58kg A型

髪の毛の色 黄色 瞳の色 紅色

魔力変換資質 炎熱・電気・凍結

魔導師ランク EX

ミッド式 ベルカ式どちらでも無い変わった魔法使用可能

ミッド式&ベルカ式も使用可能

バリアジャケット

黒い服に黒いズボンとにかく黒

FF8のスコール・レオンハートと同じ感じのデザイン

好きなもの 自然 武器 旨い料理 アニメや漫画

苦手なもの 計算 辞書 など

転生前と転生後で歳に変化無し

普段からはあまり人と話さず一人で居ることが多い

転生前に武術を少しやっていて運動神経は良い

頭も悪くは無い、デバイスは二つ持っている

能力 「神技創造」 自分想像した武器・技・魔法・召喚魔法使用可能

「幻想能力」 転移・錬金術・空間移動・など使用可能

「超変身」 想像した物や生命体に変身可能

カオス

神童焰真のデバイス 携帯時黒いピアス

人のような意思を持っている（礼儀知らずな性格）

多数の武器の変形可能である

黒刀「罪」

日本刀が黒くなったような刀切れ味は良く名刀とも呼べる一振り
光剣「破」

光の大剣横にも少し長く光の剣を伸ばすことも可能

焰刀「断」

赤き刀身の双刀 刀身を触ると熱い

魔槍「滅」

黒い槍 見た目はドラゴンクエストのメタルキングの槍

エデンと同じ焰真のデバイス敬語や礼儀知らずのデバイス
カートリッジの装填方法

無限発装填のリボルバータイプ

エデン

神童焰真のデバイス 携帯時は白いブレスレット
人のような意思を持つ（礼儀正しく優しいタイプ）

モードがいくつかある

モード ドラグーン

初期状態のモード一番よく使用されている

二つの銃を持ち5枚のドラグーンウイングと言っなの羽のような物
がある

見た目はストライクフリーダムガンダムのような感じ

モード アルテマ

一撃の攻撃に力を使うモード

大きな3枚の天使の羽に砲撃用の銃

モード エデン

最強の状態 ドラグーンの見た目で両肩に砲撃用の砲台があり
ミーティアのようなのも装備している

カオスと同じ焰真のデバイス 礼儀を心掛けている
カートリッジの装填方法

無限式オートマティックのマガジンタイプ

キャラクター紹介（後書き）

作者「このキャラ達で頑張ろうと思います」

焰真「よろしく・・・」

作者「原作崩壊やキャラ崩壊有りですが・・・よろしくです」

作者「キャラのしゃべり方や性格とか違うところもあります・・・」

作者「次回から本編ですので・・・よろしくです m・・・m」

一話 転生後と出会い（前書き）

事故で死んでしまった神童焰真

神様の気まぐれである世界に飛ばされてしまう・・・

デバイス二つを託され神様からのお願いごとをやり遂げるべく
転生された世界で頑張ることを誓うのだった・・・

第一話なので長くしてみました・・・自分的に・・・

一話 転生後と出会い

俺は事故で死んだ・・・信号無視の車に衝突し死んでしまった
普通なら・・・そのまま地獄やら天国に行くはずだったのだが・

・

真っ白な世界に神様と名乗る奴が現れて・・・

「君に二つのデバイスと言う物を渡す・・・転生だ・・・頑張ってくれ」

「転生？」

「君に拒否権は無い・・・君に凄い力も託した頑張ってくれ！」

と言われて今・・・森の中に俺は居る

（マスター転生完了です現在状況に問題ありません）

（ここは・・・どこだ？）

（しらねえよ）

（エデン場所分かるか？）

俺のデバイスと言う奴のカオスとエデン。エデンはいい子なのだがカオスは

あまり良い子とは言えない・・・

（ここはとあるアニメの世界っぽいですが・・・前見てください）

エデンに言われ前を見ると・・・見たことのあるロボットが破壊されていくが見える

（まさか・・・ガジェット！？リリなのか！）

（マスターは知ってるようですね・・・）

「行って見るか・・・」

ガジェットと女の人が戦っている場所へ向かった・・・

「アクセルシューター!!」

ガジェットが破壊されている・・・数多くの魔力の弾？を操ってぶつけて破壊しているのか・・・

（マスターやろうぜ!やろうぜ!）

（・・・少しだけやってみるか）

「カオス行くぞ・・・」

（了解!!）

カオスが言うと黒い服と黒いジーンパンみたいな感じの服装になった・・・

（戦闘の仕方は転生した瞬間にマスターの頭の中に入っています）

（便利なことだな・・・）

「黒刀・・・罪」

長い一本の黒い刀　FF7のセフィロスの使用している刀の黒いバージョンみたい

「断罪！」

「えっ!？」

大量の黒い斬撃がガジェットを襲い次々に大破していく。

「調子はいいい感じだな・・・死罪!!」

シュン!

一瞬でガジェットの背後に移動した・・・後

ドゴーン!!

次々のガジェット達は大破していった・・・

(マスター敵は全滅です・・・お疲れ様でした)

ガジェットを全滅させた後白い服の女の人はこちらに向かってきた。

「高町なのは一等空尉です・・・よろしければお話を聞かせてくれますか？」

「ああ・・・いいけど」

本物の高町なのは・・・TVの前でした見たこと無かったけど本物のようだ・・・機動六課・・・もうそこまでか・・・

「お名前を聞かせてくれますか？」

「神童焰真・・・」

「高町空尉さん・・・ここ・・・どこですか？」

（嘘つけ！分かってくるくせに！）
（カオスは黙ってる）

なのはは考え込む素振りを見せてこう言った

「貴方は次元漂流者です」
「漂流者ですか・・・」

と言う感じでこの世のこと時空管理局やいろいろ教えてもらった
教えてもらったはいいいけど・・・これからどうすればいいの
だらうか・・・

「と言うことで貴方を保護します」
「保護ですか・・・」
「はい・・・少し待っていてくださいね」

待っていると機械音とともにへりがやってきた
そのへりにのって移動したのだった・・・

「ティア！この人強いよ！！！！」
「五月蠅いスバル！！」

バシッ！

「ううゝ酷いよティア・・・」

はしゃぎすぎるスバルをティアが止めた

「えらい次元漂流者がきてしもうたのゝ」

「はやてゝこいつどうするんだ？」

「保護するけど・・・あつ！到着したようや」

ミッドチルダ中央区画

湾岸地区

機動6課

本部隊舎 部隊長室

（マスター囲まれてますよ・・・戦闘準備はどうしますか？）

（いや・・・今はいい・・・）

この部屋には、はやてと彼を保護スターズ分隊の隊長のなのはやシヤマルと同じ守護騎士であるシグナム並びにヴィータが神童焰真が来るのを待っていた。

「それにしても、強かったな・・・ぜひ手合わせを願いたいものだ・・・」

（バトルマニアの血が騒いでる）

なのはがこう思っていた・・・

すると扉が開きシヤマルと神童がやってきた・・・
なのは達の前に来て・・・

「えつと高町なのは一等空尉殿でしたっけ？」
「はい、そうですよ」

焰真は周囲にいる人達に気を配りながら言った

「神童焰真です・・・漂流者らしいです」

（（（殺気が出る（なあ））））

はやて シグナム なのは がこう感じていた
焰真は周囲に手を出させないように殺気を放っていた・・・

「シグナムの言うとおり出来る人みたいやわあ」
「戦ってみたいものだ・・・」

（マスターやろうぜ）いいだろ）
（ダメだ・・・）

どうしても戦いたいらしいカオスは五月蠅く
人の話を聞くにも念話が邪魔で聞き取れない・・・

「はじめまして、焰真君、どうやってこの世界に来たんか、覚えて
ますか？」

「いえ・・・目覚めたら・・・です」

（嘘つけよ）嘘はいけないんだぞ）転生ですだろ）
（・・・黙らないと・・・）
（ごめんなさい・・・）

カオスを黙らせて次の話に入る

「焰真君、さっきガジェットを倒した武器はデバイスでいいのかな？」

「デバイスって物かどうかは知りませんが・・・判断はそちらに任せます」

ここでデバイスを言っていると漂流者かどうか疑われそうなので嘘について判断を向こう側に任せた

そう言うとはやては、ここに居る人達機動六課についてなどいろいろ詳しい話をしてくれた・・・少々眠かったがなんとか我慢した焰真・・・危ないな・・・

その後焰真の実力を知りたいらしくシグナムと戦うことになった・

「ここに来て戦闘ばっかになりそうだな・・・」
(やった！最高だぜえ！)

ガジェットと戦う予定だったがシグナムが

「私と戦ってくれ！！」

と、言い出したので・・・6課自慢の訓練施設を使用した模擬

戦が行われようとしていた

「にやはははははてちゃん・・・いいのかな？」

「まあ実力見れるんだから・・・ええやろ新人達もよおし見とき」

「「「はい！」「」「」

こんな感じで戦闘が開始されようとしていた・・・

「もしかして・・・勧誘するの？」

「まさかな」まあ実力が気になるからやさっきの戦闘見とつても本気って感じじゃなかったみたいやし・・・まあ見極めつてやつや」

シグナムが戦いたくてウズウズしてるので・・・

「シグナムさんは騎士ですか？」

「ああ・・・剣の騎士シグナムだ・・・」

凄い殺気・・・剣をすでに構えている

「シャーリーデータは頼むで！！」

「はい勿論です！！」

なのはがはやてをジーンと見つめて・・・

「はやてちゃん本当のことってみて・・・」

「面白そうだからや！！」

本音を言ってしまった・・・

なのはは飽きたような顔をして戦闘開始を待っていた・・・

皆予想していた・・・

シグナムを強さは知っている・・・速攻で負けるか

粘って負けるか・・・選択だ・・・

戦闘では1：1焰真も刀を使用していたがシグナム相手に

接近戦はキツイだろうと考えたのだろうか

シグナムが勝利すると思っていた

「それでは、ただいまより、機動6課、ライティング分隊副隊長、

シグナム二等空尉と、次元漂流者 神童焰真君 両者の模擬戦

闘訓練を開始します！！

制限時間は45分！

勝利条件は相手を気絶させる、または戦闘の継続が不可能となった
場合とします！！

「開始！！！」

バッ！！！！

シグナムが剣を構えこちらに向かって突進スピードは速く

接近戦で勝負を挑むか・・・

「・・・虚閃^{ゼロ}」

「なっ！？」

焰真は指からエネルギー波のようなものを放った

シグナムは回避に成功しこのまま突進してくる

「カオス・・・やるぞ」

（了解だぜ！！）」

「ほぉそれが貴様のデバイスか・・・」

「黒刀・・・罪・・・」

シグナムは警戒しているのか剣を構えその場で停止している・・・

（くっ・・・なんという殺気だ・・・）

「いくぞ・・・死罪！」

「なっ！？」

一瞬でシグナムの背後に移動しシグナムはその刹那「がはあ！」
と言う声をあげ・・・焰真から離れた・・・

「先手を取られたか・・・不覚」

シグナムは笑っている・・・中段に構え警戒している・・・

「ふっ・・・いくぞ！」

両者の刃を激突し火花が散っている・・・

シグナムVS焰真を見ているメンバー達は

「凄い・・・シグナムから先手を・・・」

驚きの表所を隠せないフェイト

「エリオ君のソニックムーブ並の速さだったね！」

と興奮しながら言うキャロ

全員が違い点で驚いている・・・

シグナムから先手を取り・・・互角以上に戦っている焰真に

はやてが言う・・・

「まだ二人とも加減しとる・・・本番はここからやで」

カキイン！

キイイン！

ガキイイン！！

両者の刃をぶつかり合っている・・・

お互い技も出さず斬り合い・・・焰真が下がり・・・

「準備運動はこの辺で終わりだ・・・」

「ふっ・・・いくぞ！！」

「レヴァンティン！」

カートリッジ、ロード！」

《了解！ロードカートリッジ！》

ガシャン！

レヴァンティンを炎が纏い

「いくぞ！！はああああ！！！」

「・・・ゼロ・オスキュラス黒虚閃」

黒い虚閃を放ったパワーもスピードも上のやつを

ドゴーン！！！！

剣と虚閃がぶつかり合い、とてつもない音と衝撃波がでる

「くっ！！・・・やるな・・・」

「そろそろ決着をつける

カオス！

カートリッジロード」

（了解！！）

ガシャン！ガシャン！

「終わりだ・・・滅罪！！！」

焰真がそう言った刹那シグナムの目の前に現れ
通り過ぎていった・・・見える斬撃を残して・・・

シグナムが気づいた時には遅かった・・・
斬撃は爆発し広範囲による爆発が起きた・・・

「信じられません・・・シグナムさんが・・・」

シャーリーは信じられなかった・・・
シグナムが焰真に一撃を与えられず・・・敗北したことを

周囲にいる、なのは達もそう思っているだろう
皆驚きの表情を隠しきれていない・・・

「終わったな・・・」

シグナムを抱きかかえ、なのは達のいる場所へ向かっていった焰
真だった・・・

一話 転生後と出会い（後書き）

作者「一話は特別に長くしてみました」

焰真「誤字が・・・誤字が・・・」

作者「確認せねば・・・」

作者「ううゝ他の人の作品に比べると・・・orz」

焰真「文才無いからしょうがない・・・頑張れ」

作者「はい・・・」

作者「それでは皆様からの評価や感想待ってますm - - m」

作者「駄文ですが・・・次回もよろしくですm - - m」

二話 民間協力者（前書き）

シグナムに勝利した焰真

その後はやて達に質問攻めをくらったが

なんとか抜け出し食堂で空腹を満たしている

二話 民間協力者

シグナムに勝ったな。強かったな……。気を抜いたら危なかった俺はここからどうすればいいんだろうか……

「焰真君ええ〜か？」

「どうぞ……」

はやて達がやってきて真剣な表情になり
民間協力者として六課で働く気は無いか？と質問された

「役に立てないかもしれませんが……。それで良ければ……」
「「少しじゃないよ」「」」

シグナムに勝ってしまった時点で実力はかなりの者
リミッターがあるとは言えシグナムに勝利したのだ……

「では……。神童焰真君、機動六課へようこそ！！」
「こちらこそ、よろしく」

民間協力者として働く・
他に行く場所が無い焰真にとっては好都合な話だった

「焰真君のデバイスは……。一つだけ？」
「いえ……。二つです」

俺は皆にデバイスや能力の一部を説明した
皆は「反則だろ」とか反応はあったが……

「焔真君も訓練参加してねえ」
「分かりました……」

時は過ぎ新人達の訓練を見ている……
スバルやエリオが前線……ティアナやキャロが後ろか

「皆頑張ってますね……」

「うん……皆なのはの訓練によくついてきてるよ」

噂によればなのはの訓練は凄く凄く！厳しいらしい
あまり受けたく無いな……

「フェイトさんは接近戦のタイプですか？」

「う……ん……オールラウンダーって感じかな」
「オールラウンダーですか……」

焔真が考え込んでいると訓練所から

「焔真君！来て！」となのはから指令が出たので向かった

「どうした？……」

「ガジェットを30体ぐらい出すから倒してね」

「あ……はい」

けっこういきなりだった・・・ガジェット30体が出現したみたいで

戦闘開始のコールが出た

「んじゃ・・・エデン準備出来てるな・・・」

「いつでもOKです」

「さっきと違うデバイスだ!」

カオスを使用しているところしか見ていなかったなのは達はその姿に驚いていた・・・

「モード・・・ドラグーン行くぞ!」

二つの銃に5枚のドラグーンウイング・・・
その姿はフリーダムのように・・・

「ドラグーンファンネル・・・行け!」

背中にある10個もの小さな物体が飛んでいき・・・ピーン!

ドゴーン!!

「」「」「えっ!?!」「」「」

ファンネルから出たレーザーでガジェット15機が大破された

「いま・・・何が起きたの？」

あまりファンネルの存在の気づかなかったティアナ達が驚く
残りは15機・・・

「後半分・・・行くぞ！」

焰真は突進していく銃からエネルギー波のようなものを撃ちながら
ガジェットを次々破壊していく・・・

「すごい・・・」

思わずティアナが吐いてしまった・・・
その姿は舞ってるようで本気で無いことが見るだけで分かる

「ラスト・・・終わりだ」

ドゴーン！！

最後のガジェットもすぐに大破され一瞬の間に30機全滅
さすがに皆驚きを隠せなかったようだ・・・

「にやははゝ焰真君強過ぎるよゝ」

「そうですね？」

そこまで手を入れたわけでは無いけども・・・

訓練も終了し六課で貸し出された部屋のベッドで横になっている
すると・・・「焰真さん居ますか？」エリオの声だ

「居るぞ・・・」

「お邪魔します」

ここの際は男が少ないらしくエリオが遊びに来た

「焰真さんは・・・なんでそんなに強いんですか？」

「自分でも分からない・・・」

強さの秘訣なんて無い・・・神様に貰った能力が強いだけだろう
と思っっている・・・優秀なデバイスもいるし・・・

「僕とストラーダも焰真さんの様になれますかね？」

「ああ・・・なれるさ」

そう言つと喜びの表情見せてエリオが「頑張ります！」と言つて
部屋を出て行った・・・

（原作通りに進めば・・・皆強くなるさ）

（マスターは知ってるのですか？）

（まあ・・・な・・・）

こうして忙しい一日目は終了し焰真は深い眠りについたのであった

二話 民間協力者（後書き）

作者「お疲れ様焰真君」

焰真「ああ・・・」

作者「けっこう速いペースで更新してるかな？」

作者「一日一話出来るかな・・・」

焰真「まあ・・・頑張れ」

作者「頑張りますwそれでは」

作者「皆様からの評価・感想待ってますm - - m」

作者「駄文ですが・・・次回もよろしくですm - - m」

三話 拳とスバルとマツハキャリバー（前書き）

新しいデバイスを貰ったらしい4人

本当ならすぐファーストアラートのはずなのだが・・・

スバルと模擬戦することになった焰真

その結果は果たして・・・

三話 拳とスバルとマツハキャリバー

スバルとの模擬戦新しいデバイスのマツハキャリバーと共に
焰真に挑むのであった・・・

「焰真さん！お願いします！！」

「ああ・・・本気で来いよ」

相手は戦闘機人・・・新デバイスの力を
ここで見せてもらうか・・・。

「行きます！でやああああ！！」

殴りかかってくるが・・・振りが大きく
隙もある・・・

「甘いな・・・はああ！！」

「くっ！はああ」

スバルのパンチを回避し蹴りを入れるがガードされ
スバルの蹴りが飛んでくる

「神化の力・・・とくと見よ！！はああ！！」

「えっ！？きやあああ」

焰真の体からもの凄い覇気が飛び出し
吹き飛ばされる・・・焰真は白く赤いロボットのようになってい
た・・・

「神化によってその能力は・・・人知を超える・・・これが神化したヤルダバオトだ」

「ヤルダバオト・・・かつこいい・・・」

ヤルダバオト（焰真の超変身で変身したロボット）

轟級修羅神で操者の生命エネルギーで活動する 自己修復機能もある

操者の動きをそのままトレースすることが出来る格闘戦では一撃必殺の力を持っている

「行くぞ・・・!」

焰真がスバルを殺気の籠った目で睨むと・・・「!？」と言う反応を残し

動けなくなってしまった・・・

「行くぞ!空円脚!でえええ!!」

「くっ!?!きやあああ!」

焰真の放った回し蹴りから円型の衝撃波が飛び出し
スバルに直撃した・・・

「く・・・今のは・・・」

「まだだ・・・行くぞ!」

「負けてやれない!リボルバー・・・シュート!!」

「はあああ!!」

スバルのリボルバーシュートを覇気で吹き飛ばし
そのまま接近していく。

「真覇光拳!!」

「ううっ!？」

焰真の手から無数の光の弾が飛んでくる
良い反応でプロテクションを張ったが破壊される

「きゃあああ・・・はあ・・・はあ」

「この程度か？」

「くっ! まだだ!! はああああ」

スバルはウイングロードを展開して襲い掛かってきたが
最初より隙も大きく・・・

「そんな隙のある攻撃が・・・通用すると思うな」

焰真は簡単に回避されスバルの放つ攻撃は次々と回避されていく

「ふん!!」

「が・・・はあ!!」

攻撃の隙に蹴りを入れたスバル
耐え切れずしゃがみ込む・・・

「勝負ありだな・・・ふう」

「負けました・・・ごほっごほ」

勝負が終了したのは達がやってきた・・・

「焰真君ちよつと・・・いいかな？」

「ん?・・・ああ・・・」

なのはに呼び出され・・・なのはの元へ向かう

「本気出してなかったでしょ〜本気見たいな〜」

（マスター本気出したら機動六課なんて）
（マスターどうしますか？）

本気が見たいか・・・誰かと模擬戦でもやるのかな？

「私と模擬戦しない？」
「えっ!？」

魔王と模擬戦？砲撃魔王様とですか？

「今・・・失礼なこと思わなかった？」
「いや・・・美人と模擬戦は気が引けるなって」
「び・・・美人って・・・（ノノノ）」

とにかく・・・なのはと模擬戦
スバルのように簡単な戦いに終わりそうに無いな・・・まあやるか

「しょうがない・・・やるか」
「手加減無しだからね!!」
「あいよ・・・」

こうして……

「行くよ！焔真君！」

「ああ……行くぞ」

高町なのはVS神童焔真の戦いは始まったのである……

「行くよ！アクセルシューター！」

（行くぞ……カオス）

（了解！！）」

「黒刀……罪……断罪！！」

ドゴーン！！

「さすが焔真君……ロス・ロボスデイベイン！」

「ふっ……蹴散らせ……群狼」

「バスターーー！！」

（Divine Buster）

ドゴーン！！！！

「・・・その姿・・・」

「勝負は・・・これからだ・・・^{ゼロ}虚閃」

オオカミの毛皮のようなコートをまとったカウボーイを思わせる姿に変わり、左目部分にポインターの様な仮面の名残が形成される。2丁拳銃で戦う。自分の魂を引き裂き分かち合う能力を持つており、狼の弾頭を召喚したり、霊圧の剣を創造する事も可能。狼の弾頭は攻撃を受けると分裂する上、標的に喰らい付くことで大爆発を起す。

「くっプロテクション！」

「まだだ・・・^{ゼロ・メトラジェッタ}無限装弾虚閃！！」

銃から虚閃を連射した・・・さすがにこれには・・・

「くっ！？きゃあああ！！！」

直撃した様子・・・耐え切れるか？

「さすが・・・焰真君・・・でも！！！」

「ん？・・・バインド！？」

のんきに立ってたらバインドされていた・・・

・・・嫌な予感がする・・・

なのはのそこ・・・魔力が集中・・・まさか・・・

「行くよ・・・スターライト・・・」

「やっぱりか！」

「ブレイカアアーーーー！！！」

(Starlight Breaker)

「・・・ATフィールド」

ドゴーーーーン!!!!

「やったかな・・・!?」

「危なかったな・・・今は・・・」

「にはは・・・強いな・・・焰真君は・・・」

なのはが落下していった・・・

「大丈夫か!?」

「・・・!? (／／／)」

お姫様抱つこの形になったが・・・なんとか落下を阻止

「あ、ありがとう焰真君(／／／)」

「まあ・・・気にするな」

(はううゝ恥ずかしいけど・・・なんかうれしい・・・)

となのはは思いながら模擬戦は焰真の勝利に終わった・・・

三話 拳とスバルとマツハキヤリバー（後書き）

作者「なんてやろうだ・・・焰真」

焰真「お前が言っな！虚閃！」

作者「うぎゃ!?!」

焰真「討伐成功か・・・」

作者「甘いぜ!・・・」

焰真「そんなテンション高いなら内容考えな」

作者「あい・・・それでは」

作者「皆様からの評価・感想など待ってます」

作者「駄文ですが・・・次回もよろしくですm・・・m」

四話 とある機械の戦闘機人（前書き）

なのは達との模擬戦の終了し休憩をしていた焰真
ミッド海上にガジェットが出現と言っことで・・・

四話 とある機械の戦闘機人

「ガジェットか・・・」

（マスターの言う原作通りに進んでいない様子ですね）
（ああ・・・）

へりのほうに向かいながら考えていた・・・

「なのはとフェイトか・・・」

「頑張ろうね、焰真」

「ああ・・・」

こうして・・・現在ミッド海上

「断罪!!」

ドゴーン!!

三人の活躍でガジェットは次々と大破していく
数はそこまで多くないのだが・・・

「いつもと動きが違う!？」

「頭良くなってるよフェイトちゃん・・・」

「でも・・・これくらいなら！」

いつも以上に動きが良く攻撃も激しい
しかし・・・二人にとっては、まだ大丈夫な領域だ

「双罪！！」

刀を二つに増やし斬っていく・・・
ガジェットもほとんど大破して任務終了だったはずが・・・

「ゼロ・マグナム！！」

「っ！？プロテクション！！」

ドゴォーーン！！

突然の攻撃になんとか反応した焰真
攻撃してきた方向を見ると・・・見たこと無い戦闘機人が居た・・・

（ナンバーズ？違う・・・見たこと無い）

（スバルさんと同じタイプの機械のようです・・・）

（早く潰そうぜ！）

「誰だ？お前は・・・？」

「今から死ぬ貴様に言う名は無い・・・ゼロ・マグナム」
「その程度・・・」

難なく回避に成功・・・相手の武器は小型の銃
数は一人・・・倒すか・・・

インビシブル・エア
「風王結界」

「っ！？武器が・・・消えた？」

幾重にも重なる空気の層が屈折率を変え、その対象を不可視のものとする。

ストライク・エア
「行くぞ・・・風王鉄槌！」

「くっ！？ジェットショット！」

迫り来る風を相殺出来ず・・・敵に直撃した・・・
俺を殺すと言うには実力が無いように見えるな・・・

「くっ・・・ゼロ・マグナム！」

「零地点突破・・・初代エディション・・・」

「なにっ！？」

敵の放った弾は凍っていた・・・

「くそっ！ゼロ・ブレード！うあああ」
アウアロン
「全て遠き理想郷・・・」

生前失われた聖剣の鞘。エクスカリバーの真の力である「不老不死」の効果を有する。

真名解放を行なうと、数百のパーツに別れ、使用者の周囲に展開される。あらゆる攻撃・交信から対象者を守るこの世最強の守り。それは魔法の領域であり、防御というより「遮断」であるという。

攻撃を弾き・・・そして

「とどめだ・・・約束された勝利の剣!!」
エクス
カリバー

湖の精から授かった、至上の聖剣。人々の「こうあって欲しい」という願いが形と成った神造兵装であり、星の鍛えた「究極の幻想」。所有者の魔力を光に変換、集束・加速させることで運動量を増大させ、神霊レベルの魔術を行使する。

ドゴォーーン!!!!

「終わったか・・・エデン情報は・・・いいな」

(OKマスター)

今の戦闘機人のデータはとれた・・・戻って解析するか・・・それにしても・・・原作には居なかったな・・・

機動六課 焰真の部屋

「来い・・・霧フクロウVer.V・・・形態変化」

霧フクロウVer.Vはレンズに変化し・・・

(エデン・・・画像を頼む・・・)

（さっきの戦闘機人ですね。）

（ああ・・・）

戦闘機人のデータを見ていた・・・

後々出てくるナンバーズと変化は特に無く戦闘能力はナンバーズ
以下

量産型かも知れないが原作には居ないはず・・・

「少し寝るか・・・」

焰真は状況を頭で整理しながら・・・深い眠りについた・・・

四話 とある機械の戦闘機人（後書き）

作者「原作と違う道に……………」

焰真「おいおい……………」

作者「大丈夫〜だって」

焰真「お前的大丈夫は信用できない……………」

作者「…………orz」

焰真「まあ…………気合入れることだ……………」

作者「質問〜焰真君の知ってるアニメやゲームは？」

焰真「子供の頃からやってるからな〜いろいろ」

作者「…………最強だね…………それでは」

作者「皆様からの評価・感想など待ってますm - - m」

作者「駄文ですが…………次回もよろしくですm - - m」

五話 襲撃再び（前書き）

戦闘機人を撃破した焰真

原作には無いことにビックリしながらも

民間協力者として頑張っている

平和な時間はあまり無い・・・

五話 襲撃再び

何やら話があるらしくフェイトが部屋に来ていた

戦力が足りないらしく民間協力者だと協力者扱いらしいので

一時的シグナムをなのはの補佐にして俺をフェイトの補佐にする
と言う話だ

「ダメかな……」

うう……そんな瞳で見られたら……断れないな……

「正式な補佐になるのか？忙しくなるってことだろ？」

「うん……最近襲撃とか多いから戦力が欲しいらしくて……ダメかな？」

「いや……俺で良ければフェイトの補佐をやるが……」

「本当！？ありがとう」

喜ぶとこなのか？まあ頑張るしか無さそうだな……

原作に無い物語……か

「フェイトの美人顔を守るよう頑張るさ」

「び……美人って（／＼／）」

（うう……真顔で美人って言っなんて……恥ずかしいけど……うれしいかも）

なんてフェイトが顔を赤くしながら考えてると……

「そろそろ練習の時間だろ……行くか」

「うん！よろしくね、焰真」

「ああ・・・こちらこそ」

こうして・・・フェイトの戦闘補佐？副官？まあよく分かんないけど

こうなったからには守るしか無い・・・

練習中～

「珍しいな～はやて」

「まあ～時間が空いたから見に來ただけや」

はやてが練習を見に來るなんて珍しい・・・まあまだ一週間しか居ないけど

「おい！焰真！模擬戦やるぞ！」

「・・・あいよ」

いつもながら五月蠅いヴィータさん・・・

「んで誰と戦えばいいんだ？」

「今日の相手は、わた「却下」なんでだ！？」「めんどい」「こちや」「ちや」「却下」「うう・・・」

勝った・・・これで模擬戦をしなくても・・・

「焰真、私とやらない？」

「・・・もう一回言ってくれ」

「私とやらない？」

・・・フェイトですか！？嫌だ・・・めんどくさい・・・
ならヴィータと・・・

「ええくなフェイトちゃんとかやってみてくな焰真」

「焰真・・・テストロッサとやるのか？」

シグナムとはやての言葉により断れなくなり・・・

・・・こうして・・・

「補佐官の実力見せてね」

「あいよ・・・」

フェイトと模擬戦することになったのだ・・・
場所は晴れ晴れとした海上（焰真の能力で作りに出した場所）

「快晴だな・・・フェイト」

「っ！？・・・戦闘中に敵に話かけてるの？」

フェイトは自分が馬鹿にされたような表情をして構えている

「違うぞ・・・天気がいいなぁと言っただけだ」

「強者の余裕と言いたいのか？・・・なら」

「・・・乗せられたな・・・」

フェイトは焰真に向かって突進してくる・・・

「ハーケンセイバー！！」

「天気が良いのは・・・こういうことだ！！」

太陽光線をねじ曲げ、一点に集中させて

「にちらんとついで日輪天墜！！」

「うそ！？」

空から一つのレーザーのような光フェイトはギリギリ反応してソニックムーヴで回避するが

そのとてつもない威力が見るからに分かる・・・

「言葉に怒り突進してくるからチャンスだと思ったがな・・・」

「さすが焰真だね・・・」

フェイトも見直したのか警戒した構えでこちらを見ている・・・

「プラズマランサー！」

「なら・・・」

一点に向かって襲い掛かってきた・・・

焰真はコインを上指で弾き・・・落ちてきたコインを・・・

「超電磁砲！」
レールガン

「なっ！？」

ドゴーン！！

物体に電磁加速を加えて放つ技・・・

フェイトも予想も出来ずバリアジャケットが一部打ち抜かれてい
る・・・

「今は・・・凄い技だったね・・・」

「まだまだだ・・・」

テレポート
空間移動で一瞬でフェイトの背後に移動し・・・

「なっ！？速い！」

「虚閃・・・」

さすがのフェイトも反応出来ず直撃・・・したが
まだ・・・戦える様子だ・・・

「今のはビックリしたよ・・・焰真凄いや・・・」

「耐え切ったフェイトも凄いがな・・・」

ソニックムーヴも十分速いが空間移動には敵わないかな
フェイトはバルディッシュを大剣の姿にして構えた

「カオス・・・モード光剣」

カオスのモードを光が伸びる大剣にした・・・

「行くよ・・・はああ！」

「うおおお！」

ガキイイイン！！

ガキイイイン！

お互いの大剣がぶつかり合っている

「さすがに同じぐらいの大きさだと・・・終わらないな・・・」

「はあ・・・さすがだね焰真」

焰真は大剣を戻し・・・

「スピリット・オブ・ソード！」

とてつもの長いO'sスピリット・オブ・ソードを出した・・・

「いくぜ・・・はあああ」

「くっ！」

さすがの長さにも隙も多いように見えるが

焰真には隙が見当たらずフェイトも攻撃の機会が無く回避してばかり

「さすが・・・フェイト・・・」

「はあ・・・はあ・・・」

フェイトに疲れが見える・・・決め所だ・・・

「トライデントスマッシュャー!!」

「なっ!? 砲撃か!」

今の体力で砲撃を放つか・・・さすがフェイト

「星空間・・・」

焰真を中心の空間が広がっていく・・・

「なっ・・・重い!？」

「この空間の中では・・・自由にさせない・・・」

重力も操りフェイトを動けなくしたところで・・・

「チェックメイトだ・・・」

黒刀「罪」をフェイトの首に向けて模擬戦終了・・・

「ううゝ負けちゃった・・・」

「お疲れ様フェイト戻るか・・・」

こうして模擬戦は終了

後からシグナムに私とも!と言われたが断った・・・

民間協力者からフェイトの補佐か・・・大変になりそうだな・・・

五話 襲撃再び（後書き）

作者「どんだけアニメや漫画知ってるの？」

焰真「作者と同じ数だけ・・・」

作者「それ言われたらおしまいだ・・・」

作者「まあお疲れ様」

焰真「次回から忙しくなるな・・・」

作者「駄文ですが頑張ります！」

作者「評価をしてくださった方ありがとうございます！」

作者「皆様からの評価・感想など待ってますm・・m」

作者「駄文ですが次回もよろしくです」

六話 ファースト・アラート!? (前書き)

フェイトの補佐として働くことになった焰真

原作で言うファースト・アラート

ついにこの時が来た

キャラの覚醒・新デバイスの力の発揮

しかし・・・焰真は原作に居ない相手と戦うのであった・・・

焰真視点がほとんどですww

六話 ファースト・アラート!?

原作で言うファースト・アラート

4人となのは達の活躍で成功に終わる・・・キャロの覚醒
しかし・・・原作に無い数のガジェット達が襲い掛かるのであつ
た・・・

「この数・・・違うな・・・」

「何が違うの？焰真？」

「いや・・・こつちのことだ・・・先に出るぞ！」

凄い数のガジェット反応を先に察した焰真は先に出撃
フォアード4人やなのは達も出撃・・・

「っ!？この数・・・生命の樹峻^{セツダウクラ}厳！」

光る巨大な樹を作り上げ、周囲の敵を串刺しにする技。貫いた相
手の生命力を奪うことも可能。

（この技でも・・・数は減ったが・・・まだか）

（どうしますか？）

（地道に減らすか・・・）

「ヘキサゴナル・トランスファー・システム
「六方転晶系」

狙いを定めた六角柱状の空間を丸ごと転送する技

これで敵をなのは達から遠ざけるが・・・まだ居るか・・・後は
頼む

焰真は敵を転送させて場所に転移した・・・

「さて・・・楽しい時間の始まりだ・・・」

周囲が寒くなり・・・凍てついてきた・・・

「だいくれんひょうりんまる
大紅蓮氷輪丸！」

刀を持った腕から連なる巨大な翼を持つ西洋風の氷の龍、及び三つの巨大な花のような氷の結晶となる氷と凍気を自在に発し操る。又、刀以外の部分は全て氷でできている為、たとえ砕かれても水（液体）としてその場に無くとも空気中の水分など）さえあれば何度でも再生可能

「ぐんちゆう
群鳥氷柱！」

ガジェット達に大量の氷柱を飛ばす・・・が数は多く相手も攻撃してこない訳は無く・・・

「まだやるか・・・」

「貴方はここで・・・死んでいただきます」
「なっ！？」

戦闘機人が居た・・・2人・・・

見た感じ武装はスバル・・・似ている・・・コピーか？

「まだ死ぬわけには・・・いけない」

「行きます・・・はああああ！」
「セロ
虚閃！」

虚閃に反応した相手が難なく回避する・・・
また仕掛けてきた・・・

「てえええええ！」

「ならっ！カミキリ神刃！」

焰真の手からエネルギーの刃が伸びた（ビームサーベルみたいな
の）

「なっ！？がはぁ！」

さすがに反応出来ず直撃・・・胸を貫きまだ伸びて行く

「くそっ！リボルバーシュート！！」

「なにっ？」

スバルの技？こいつは・・・スバルのコピーか？
スバルの技を放ってくる相手だが焰真の見切られて・・・

「ガジェットまとめて潰す！」

カオスをSET・UPさせて光の大剣にして・・・

「見せてやろう・・・奥義つてやつを！」

「なっ！？まとめてだど！？」
グランドクロス

「聖十字！！！」

巨大な光の十字架・・・天に伸びていく光

「終わったか・・・」

「聖十字によって全滅した・・・
戦闘機人・・・原作に無い物語・・・」

「戻るか・・・」

「やってるな・・・」

皆のところに帰ると終盤になったところで
フリードの姿も大きくなっている

「焰真！大丈夫？どこいったの？」

「ああ・・・フェイトか・・・敵を残滅してた」

フェイトのほうは終わったようでごっちに来た

無事終了し・・・ファースト・アラートは終了
しかし戦闘機人と大量のガジェットのこと・・・
焰真は残滅跡にいて・・・確認していた・・・

ホワイトフーチ
「風導八卦白蛇」

人の思念を嗅ぎ取ることが出来る白い蛇を作る技。遺留品に残った思念から持ち主の居場所を特定したり、周囲の様子を探るなどの使い道がある。

「なっ!?!?・・・これは」

ガジェット達の真相

原作に居ない戦闘機人の正体・・・

焰真は知ってしまった・・・新たな敵の存在を・・・

六話 ファースト・アラート！？（後書き）

作者「今回は短いですw」

焰真「更新しろよ！！」

作者「うう……すいませんm - - m」

焰真「読者の皆様すいませんでしたm - - m」

作者「頑張ります……それでは」

作者「皆様からの評価・感想を待ってますm - - m」

作者「次回もよろしくです」

七話 模擬戦（前書き）

今日は焰真の嫌いな模擬戦日
いろんな人と戦わなければいけない・・・
最初の相手はシグナムだ

七話 模擬戦

今回のルール

1時間の戦闘 魔力切れor気絶

「あの時以来だな・・・焰真、次は負けんぞ！」

「こちらこそ・・・」

お二人とも、準備はいいですか！？

それでは・・・始め！！

「黒刀〽罪〽行くぞ！」

「剣の騎士シグナム・・・参る！」

お互い剣を構え・・・

ガキイン！

キイイン！！

カキイイン！！

「さすが・・・シグナム」

「くっ・・・さすがだな！レヴァンティン！カートリッジ・ロード
！」

ガシャン！

レヴァンティンが炎を纏う

「なら・・・モード・・・ダイゼンガー！」

鬼神のような見た目で長い刀を持ちその刀は巨大な大剣になる

「行くぞ！シグナム！はああああ」

「ふっ！面白い！」

ガギイイイン！！

ダイゼンガーも持つ参式斬艦刀の一撃をなんとか持ちこたえるシグナム

レヴァンティンにひびが入る・・・

「くっ！重い・・・」

「止めたか・・・なら！ゼネラルブラスター！」

「砲撃だと！？」

ドゴーーーーン！！

両肩から放たれたゼネラルブラスターがシグナムを直撃
さすがのシグナムも・・・っ！？

「はあ・・・はあ・・・さすがだな・・・レヴァンティン！」
『ボーケンフォーム』

レヴァンティンは剣の形から・・・弓の形になった

「なっ！？離れるか！」

焰真はシグナムから距離をとった・・・が
シグナムから放たれた矢がとんできた

「負けられない！神技！アスタニツシユグリツツ！」

焰真の出した弓から光の矢が数々と飛んでいく

ドゴォー！ー！ー！！

「くっ・・・無念・・・」

ドサツ！

シグナムは力尽きたのかその場に倒れる・・・
焰真は抱きかかえてなのは達の場所へ転移した・・・

「大丈夫か？シグナム？」

「・・・はっ！焰真！なつなにを（／／／）」

「ああすまん・・・」

シグナムを降ろした何故かシグナムが残念な表情になっていた
次の対戦相手は・・・なのはか・・・

「行くよ！焰真君！」

「ああ・・・俺も本気で行くか・・・」

（マスターやるのですか？）

（ああ・・・行くぞ！起動・・・ヴァルキリー）

カオスとエデンが合体して一つのデバイスになった・・・

名前 ヴァルキリー ランクEX LV5（カオス&エデンLV4）

見た目は白色と金色の鎧に金色のマント

「動きやすい感じだな・・・」

「・・・まだまだ凄い能力いっぱいだね・・・焰真君は」
「そうでもないさ・・・行くぞ！」

戦闘・・・開始！

「行くよ！デイベイーンバスター！」

「ヴァルキリーソード・・・」

剣を出し砲撃を弾き飛ばす

「うそ！けっこう本気で撃つたのに・・・」
「行くぞ・・・聖十字！」
グランドクロス

光の十字架を放ったが回避された
さすが・・・魔王この程度じゃダメか・・・

「霸天朱雀！！」

「エクセリオンバスター！」

ドゴオーン！！

お互いの衝撃波は相殺された・・・

（マスターどうですか？）

（まあまだ20%ぐらいだな・・・終わらせる）

「もう終わりにする・・・」

「こっちだって・・・」

剣を上へ上げ剣が十字架の魔力を帯びた・・・

「受けてみる・・・ファイナル・グラウンドクロス最終聖十字！！！！」

ピキーーーーーン！

焰真が放った十字架で・・・訓練所がほとんど消し飛んだ
威力は抑えたのにな・・・やってしまった

「大丈夫か？なのは・・・」

「にはは・・・もうダメかも・・・」

なのはとの模擬戦も終了・・・今は休憩時間

「ねえ・・・焰真」

「なんだ？フェイト……」

フェイトが悩んだ表情で話しかけてきた

「なんで……そんなに強いのか？」

「……たくさん修行したからだ……」

（嘘つけよチート！）

（……良い子は黙れ）

（……はい）

「補佐官のほうが強いって……ダメだね私……」

「いいや……フェイトは強いよ……エリオやキャロの面倒もち
やんと見てる

戦闘技術だって、なのはに遅れをとらない……強いよフェイト
は」

フェイトの頭を撫でながら言う

「ん……ありがとう焰真」

「ああ……これから頑張ろうな……」

「うん！」

フェイトの悩み話を聞いて模擬戦日一日目を終了させた焰真
新たな力の発動させてとてつもない実力を見せ付ける焰真
彼の能力には……謎が多い……

七話 模擬戦（後書き）

作者「いろんな技使いすぎだw」

焰真「能力だからな・・・仕方無いさ」

作者「それにしても・・・戦闘多いなw」

焰真「お前が決めることだろ・・・」

作者「うん・・・」

焰真「はあ・・・」

作者「頑張らなければ！それでは」

作者「皆様からの評価・感想待ってます」

作者「駄文ですが・・・次回もよろしくです」

八話 補佐官のお仕事（前書き）

フェイトの補佐官になって仕事が増えた・・・
フェイトの仕事を一部手伝うが・・・フェイトの仕事が多く
一部が・・・多い・・・今日は朝の練習からだ

八話 補佐官のお仕事

「さて・・・たまぁには俺も動くか」

「いつつも動いてるのに？」

確かに・・・練習時にはよく動くが・・・
自分でもいろいろ試したいことがあるしな・・・

「オリジナルの宝具・・・」

アニメにも出てきていない自分の考えた宝具作成
イメージと魔力がもの凄くいる・・・俺の能力が無いと無理だ

「やるか・・・」

焰真は練習場の一部を借りて宝具作成して使用することにした

「イメージは・・・あるさ」

この世界に来てから何個かイメージはしてある
凄い宝具は凄い魔力・・・

クリエーター エンド ファンタズム
「創造と終焉の幻想」

クリエーター エンド ファンタズム
創造と終焉の幻想 EX

焰真の状況・状態に合わせて宝具を出してくれる便利な宝具
宝具に意思は無いが状況に応じてちゃんと出してくれる

（これが・・・宝具ですか？凄い魔力ですね）

(マスターすげーぜ!!！)

(まだ・・・これからだ・・・)

「バラディン騎士の誓いの剣!」 カリバー A A

銀色の輝く騎士の剣、斬る相手の悪の心が大きければ
凄いダメージを与えられる剣

「凄いいね、焰真ロストロギア反応あるよ・・・」
「・・・気にするな」

痛いツツコミをされたが・・・そこ気にしたら
宝具を作成出来ない・・・

「最後だ・・・コスモ銀河の破弾!!」ノヴァ

空間から放たれる4つの破壊の一撃

その一つがスターライトブレイカー並みで反則技

ドゴオーーーン!!

「焰真・・・また壊したね・・・お仕事増えた」

「・・・やってしまった・・・」

借りた練習場まで破壊してしまった・・・仕事が増えた焰真だった

今はフェイトがロストログア？だったっけ？そんな感じのやつ
危険性を話し合う会議みたいな感じのに出てるから外でのんびり
待つてる最中・・・

「・・・暇だな」

焰真は特に何もすることなく・・・待つのみ
さすがに暇だが・・・何も無い・・・

「少し・・・寝るか・・・」

焰真の意識は闇に落ちていった・・・

「・・・ん？枕なんか・・・無かったよな？」

何か枕のような感触がする・・・
確か・・・フェイトを待ってて・・・寝たような・・・

焰真が目を開けると・・・

「おはよう、焰真」

「ああ・・・すまんフェイト」

フェイトだった・・・会議は終了し一時間も寝てたらしい
仕事は大体終わっていたから・・・よかった

「まだ眠い？」

「いや・・・もう大丈夫だ、フェイトこそ眠そうな顔してるぞ」
「んゝ寝てるんだけど眠いんだよね・・・」

フェイトの寝てる？4時間程度か？

「何時間寝てる？」

「2〜3時間ぐらい寝てるよ。」

俺はため息をつき・・・座りなおしてフェイトの頭を膝に持って
いく・・・

「なっ？どうしたの？？焰真（／／／）」

「少し寝る・・・仕事は終わってるだろ・・・」

「えっ・・・でも・・・」

「いいから・・・おやすみ」

フェイトの頭を撫でてやると諦めたのか
気持ちよさそうに寝てしまった・・・

その後・・・六課の練習場で練習中・・・

アンリミテッドブレード・ワークス
「無限の剣製」

錬鉄の固有結界。目視した武器・刀剣を結界内に登録し複製、貯蔵する。固有結界を生成する過程で投影（正確に言えば「心のカタチにする」魔術であり、一般的な投影魔術ではない）を行うことで、結界内に登録した剣や、目指した武具を複製出来る。刀剣に宿る「使い手の経験・記憶」ごと複製しているため、初見の武器を複製してもある程度扱いこなすことが出来る。

「調子がいい感じだ・・・ん？誰だ!？」

「バレてしまったか・・・」

「シグナムか？どうした？」

「いや・・・焰真がここに来るのが見せてな、どんな修行をしているか

気になったから見に来たのだ・・・」

「そうか・・・」

せつかく見に来てくれたんだし・・・

「やるか？」

「いいのなあ!？」

「ああ・・・行くぞ!」

いきなり模擬戦!!スタート!!
ルールは簡単・・・お互いの気が済むまで戦っただけ

「レヴァンティン!!」
「行くぜ・・・雨燕Ver・V」
ローンディネ・ディ・ビオロ・サヨンボンゴレ

焰真の出したリングから青い炎が出てボックスに炎を入れて・・・

「時雨金時・・・形態変化!」
カンビオ・フォルマ
「なっ!?武器が!?!」

時雨金時の雨燕が合体して羽のある長刀に変化したのである・・・

「さて・・・行くぞ!」
「面白いな・・・はああああ!」

ガキイイン!
カキイイイン!

「さすが烈火の将・・・剣の腕はさすがだな・・・」
「今更だな・・・はああ!」
「時雨蒼燕流 守式・四の型 五風十雨!」
しぐれそうえんりゅう

相手の呼吸に合わせて攻撃をかわす技

「なっ!?くっ!レヴァンティン!」

ガシャン!ガシャン!

「紫電一閃!」

「斬刀「鈍」．．．零閃！」

その刹那．．．「な．．．につ！」目にも留まらぬ速さの
抜刀術がシグナムを直撃．．シグナムはそのまま倒れた．．

「また．．．負けたか」

「ああ．．．またやろうな．．．」

こうして突然模擬戦も終わって
焰真の一日は終わったのである．．．．

八話 補佐官のお仕事（後書き）

作者「お疲れ様っすw」

焰真「アクセス数も多く・・・皆様ありがとうございます」

作者「これからも・・・よろしくですm・・・m」

焰真「こっちはっか投稿してていいのか？」

作者「なんのことやら・・・」

焰真「まあいいけど・・・」

作者「頑張るもん！・・・それでは」

作者「皆様からの評価・感想待ってますm・・・m」

作者「駄文ですが、次回もよろしくです」

外伝 これが世界か！？（前書き）

いろんな事情で世界サッカーに参加することになった焰真
フェイトが助けた人が・・・ぜひ！とのことで
暇つぶしに参加するつもりが・・・大会だったのだ

外伝　これが世界か！？

「今日は！なんと！機動六課の聖天使！神童焰真君がチームに参加してるぞ！」

「「「「「おおおおお！！！！」」」」」

観客から・・・凄い声援だ・・・
そんな人気者だったわけ？

ルールも時間も現実世界と似ている
ただ・・・相手チームに魔法が使えるやつが居るらしい

「焰真君・・・期待してるよ」

「ああ・・・」

チームのキャプテンからの期待されてるが
サッカー経験など・・・無い・・・

・・・試合・・・開始！！

「始まったか・・・」

相手チームのボールから・・・さすが世界だ・・・
初心者が入る世界では無いな・・・

「だが……」

魔法使用可能なら……こちらが有利だ

「ボルケーノカット!」

「なっ!?なんだこれ?うわぁ!」

炎の壁に邪魔され……ボールは俺のところに

「やるか……」

「させない!」

「甘いな……ライティングアクセル!」

もの凄い速さのドリブルで相手を回避して……

「いくぞ!……エクス……カリバー!」

上にジャンプして足を上げ……剣が……

「いけええ!!」

相手には止めれるわけなく……

「ゴール!!!!!!」

以外と簡単に入ってしまった

このままやると……相手が可哀想だな……

「さて……適当に……なっ!?!」

「ブレイクカノン!」

魔力を纏ったシュート・・・出来るのか・・・
魔法使える奴が居るのは・・・本当だったのか・・・

「手加減無用だな・・・」

現在 前半 25分 1:1

「メテオシャワー!!」

もう手加減なんて・・・してません
全力で潰す・・・フェイトの前で負けてられん・・・

「流星ブレードV2!!」

さすがに全力でやると点差が開くと思ったが
相手もなかなかやる・・・さすが世界

「バルガードブレイク!」

「ちっ! やられたか・・・」

お互い一步も津譲らぬ戦い・・・
こんな感じで前半終了・・・3:3だ

「後半も頑張るか・・・」

「焰真・・・」

「ん? どうした? フェイト?」

選手席にフェイトがやってきた
入っていいのか?

「無理しないでね・・・」

「ああ・・・頑張ってくる」

「うん！頑張つてね！」

ここまで言つたからには負けられない
後半・・・開始！

「風神の舞！！」

相手の守りを抜いて・・・

「ノーザンインパクト！」

シュートを決める！！

相手も同じような感じの攻めで俺を動かさないように
ボールを上手く回してシュートする4：4

「タイガー・・・ドライブ！！」

「くそっ！？」

お互いのゴールキーパーもボールを止めれず
イライラしている・・・

後半も・・・後わずか・・・ロスタイム！6：5

「はあ・・・はあ・・・疲れるな・・・」

ロスタイムは一分・・・相手がボールを持っている
しょうじき言つて・・・やばい状況だ・・・

これで決められたら引き分けだが・・・PKは負けるだろ・・・

「とどめだ！ブレイクカノン！！」

相手のシュート・・・ゴールキーパーは無理そうだな
なんとか・・・追いつけるか？

「くっそ！負けるわけには・・・後15秒か・・・」

なんとかボールに追いつく
残りの時間で勝つには・・・

「騎士の誇り・・・見せてやる！」

相手の放ったシュートから・・・先回りして・・・

「エクスカリバー！！！！」

相手のシュートをシュートする・・・

「くっ！！・・・うおおおお！！」

ズバァー！！！！

エクスカリバーが相手のシュートをやぶり
ゴールに一直線・・・

「ゴーール！！！！焰真選手決めた！！」
「「「「「うおおおお！！」」」」」

凄い声援だ・・・凄く疲れた
早く戻って・・・寝るかな・・・
こうして・・・焰真の世界へのサッカー挑戦は終了し
さらに・・・有名人になった・・・

機動六課・・・焰真の部屋

「疲れた・・・もうダメだ・・・」

寝ようとした時フェイトが入ってきた・・・

「ごめんね焰真・・・せつかくの休日が・・・」

「いいさ・・・いい運動になったよ」

「ありがと・・・焰真」

何故お礼を言われるのかは・・・まったく分からないが
とにかく眠たいな・・・

「寝るの？」

「ああ・・・眠たいからな・・・」

「そっか・・・」

何故かフェイトがベッドに座り
・・・・・・膝枕？

「この前のお返しだよ・・・」
「あっああ・・・ありがとう」

驚く気力も残っていなかったので
そのまま寝てしまったのだった・・・

後日・・・とてつもない有名人になった焰真は
いろんなチームから誘われるのは・・・言うまでもない・・・

外伝　これが世界か！？（後書き）

作者「イナズ イレ ン！！」

焰真「もうちょい長くしろよ！」

作者「すいません・・・ネタが・・・」

焰真「本編短かったら・・・」

作者「頑張ります・・・」

焰真「はあ・・・」

作者「頑張ります・・・それでは！」

作者「ご感想ありがとうございました！」

作者「皆様からの評価・感想待ってますm - - m」

作者「駄文ですが・・・次回もよろしくですm - - m」

九話 事件（前書き）

フエイトと共に街に現れた魔術師を撃退中だが
何やら・・・嫌な予感・・・

九話 事件

現在 魔術師が街で暴れてるとのこと
フェイトと二人で戦闘中

「逃げ足は・・・速いな」

「黙れ！フリーズボール！」

まあ今強盗？だったわけ？

魔術師さんと戦闘中・・・弱いな

「アクセラレータ
一方通行」

運動量、熱量、光などなど

体表面に触れたあらゆるベクトル（向き）を任意に操作できる
・・・つまり相手の攻撃を相手に向けてとばすってことかな

「なっ！？俺の攻撃が？」

自分の攻撃をプロテクションで守るが・・・

「もう終わりだ・・・断罪！」

一人目撃撃破・・・

「あゝめんどくさいな・・・」

（マスターAAの魔力反応！）

（なに？骨のある奴だな・・・）

俺は反応の場所に向かった・・・
そこには・・・

「君が機動六課の聖天使か？」

「天使じゃないな・・・騎士かな？」

「ふっ・・・まあいい・・・死ね」

相手は俺に出会ったその時点で死亡フラグなのにな・・・
だが・・・そこらへんの雑魚とは違うな・・・

「ヘルインフェルノ!!」

「なっ!?!S反応？」

巨大な炎の壁が迫ってくる・・・

「ウォータガ!!」

なんとか相殺・・・強いなこいつ

「強いな・・・だが・・・超電磁砲!」

「バーニングウォール・・・止めれないだろ？」

「打ちぬけ!!!」

火の壁を打ち抜いたが・・・当たってないな
リミッターでもかけてたのか・・・あれでAAは無いな・・・

「ヘルインフェルノ!!」

「ギラグレイド!!!」

凄まじい炎の激突　空が・・・燃えている
相手の表情はまだ・・・余裕だな

「やるな・・・甲縛式O・S黒雛！・・・鬼火！」

超密度の炎弾を発射する・・・相手の技はやぶれたが
相手には当たらない・・・

「ちっ・・・カオス！エデン！決めるぞ！」

（了解・・・リミッター解除します！）

（能力解除・・・ヴァルキリーモード完全解除可能）

（モード・・・ヴァルキリー！）

ピキーーーーン！

（機動六課）

「ロストロギア反応・・・焰真さんからです！」

「なんやて？」

ビックリだわ・・・ロストロギア反応？
人間からやと・・・？ありえへんわ・・・

「焰真君・・・あれは・・・あの時の！？」

私と模擬戦したときに出した鎧・・・
私と戦った時とは・・・全然違う・・・

「凄いです・・・綺麗です・・・」

フォアードの4人もビックリ
身に纏うオーラが・・・

「どうすんだ？はやて？」

「様子見るわ・・・」

「もう・・・終わりだ」

「くっ・・・」

冗談だ・・・俺は弱くは無いが
奴の魔力値に比べたら・・・さすが聖天使だな・・・機動六課・・・
・恐ろしいな

「ヘルインフェルノ！！」
グランドクロス
「聖十字！」

相殺！・・・では無く聖十字が勝った・・・
元の魔力が違う・・・

「その程度か？」

「くそお！デスファイヤー！！！」

「つまらん・・・ファントムフェニックス 炎天鳳凰！」

巨大な炎を纏った鳳凰・・・敵の必殺技とやらも
たいしたこと無かったな・・・

「とどめだ・・・」

「くそ！ま・・・まだだ！」

悪あがきか？・・・もう遅いかな・・・

「いいのか？貴様の相棒が・・・どうなっても？」

「なっ！？・・・貴様フェイトに何をした・・・」

「もうそろそろだな・・・」

く機動六課く

「はやてちゃん！フェイトちゃんが捕まった！」

「なんやて！？」

フェイトはSSランクの魔術師に敗北

敵は強い・・・

「焰真君に・・・任せるわ・・・今行っても足手まといや・・・」

「そんな！？行かせてよ！」

「焰真君を信じるんや!」

く街上空く

「貴様ら・・・死んで済むと思うな!」

「今頃言っても遅いぞ?・・・なっ?」

「見せてやろう・・・守護転送!」

その瞬間フェイトを抱えた

一人の男がこっちの転送された・・・

「なに!?・・・ここは」

「守護転送は自分が守護契約をした者を自分のところに転送する技だ・・・」

「なっ?だが・・・こいつの命がどうなってもいいのかな?」

・・・完璧な死亡フラグを踏んだな・・・

「もう貴様らに安息の時間は・・・無い」

「なに言つてやがる!!??」

究極の十字架・・・見せてやろう

「聖なる十字架！その身に刻め！！」

ヴァルキリーの究極砲撃魔法の一つだ・・・

アルティマ・ギナール・グランドクロス
「究極最終聖十字！！」

ピキーーーーーン！！！！

・
・
・

ドゴーーーーーン！！！！！！

「フェイト大丈夫か？」

「ん・・・焰真？・・・！敵は！？」

「空をしてみる・・・」

「えっ！？」

雲に巨大な十字架？何kmあるだろう・・・
空に巨大な十字架が完成していた・・・

「帰るか・・・」

「・・・うん」

（機動六課）

「焰真君・・・少しゝええか？」

「ああ・・・もう分かってる」

「・・・リミッターのことは聞いてへんで」

「すまない・・・」

機動六課の皆には話していなかった・・・

俺の能力のすべてを・・・

「焰真・・・まだ隠す能力があるのか？」

「ああ・・・シグナム・・・俺には3つのリミッターがある」

「・・・3つ!?」「・・・」

フェイト・・・なのは・・・シグナム・・・はやて

ここに居る俺以外の皆驚いた・・・

「1つ目のリミッター　ヴァルキリー・・・今日のやつだな」

「あれで・・・一つ目・・・」

「2つ目のリミッターは・・・オーデインだ・・・」

オーデインの詳しい能力は話さなかった・・・

「最後が・・・ファイナルだ・・・」

「どれくらいなん？ランクは」

「EXの2倍くらいだな・・・」

「・・・え?」「・・・」

簡単に言つと・・・最強?までは言わないが
強い・・・

リミッターのことを詳しく話

再度能力のことを話す焰真だった・・・

九話 事件（後書き）

作者「能力解除！かつこいいw」

焰真「強すぎるな・・・」

作者「オーディンとファイナルは後々登場しますw」

焰真「何話予定なんだ？」

作者「さあ・・・決めてないw」

焰真「まあ頑張れ・・・」

作者「あい・・・それでは！」

作者「アクセス15000？だったかな・・・ありがとうっぞいます！」

作者「皆様からの評価・感想待ってますm - - m」

作者「駄文ですが・・・次回もよろしくです」

十話 悩み（前書き）

フエイトはSSランクの相手に負けた
相性が悪かったから？自分が弱かったから？
何故なのだろうか・・・

十話 悩み

「・・・負けちゃったな」

SSランクの相手に敗北し焰真に助けてもらったフェイト
最近助けてもらってばかり・・・

「フェイト・・・大丈夫か？」

「焰真・・・ああうん大丈夫だよ」

「・・・そうか」

（マスターかなり病んでますよ・・・たぶん）

（負けたのが悔しいんだろうなっ）

（困ったな・・・）

言葉はいつも通りなのだが・・・

表情はそうでは無い・・・

「悔しいのか？負けたのが・・・」

「っ!？・・・」

「誰にだって敗北はある・・・俺にだって」

ここでダメになつては・・・これからどうする？

原作では・・・まだいろいろと・・・

「違うんだ・・・負けたのは大丈夫・・・」

「負けたのは?・・・」

敗北は気にしていないのか・・・

なら・・・何を気にしている？

「焰真に迷惑かけてばっかだなあゝって・・・」
「そんなことか・・・」

そっちだつたか・・・困ったものだ

「俺はフェイトの補佐だ・・・助けるのは当然だろ？」
「うん・・・でも、助けてもらってばかりじゃ・・・」
「上の者として・・・恥ずかしいと？」
「うん・・・そんな感じかな・・・」

こりゃゝ相当病んでるかな？
気持ちに分からないわけでもないが・・・

「俺だって、フェイトに助けてもらってる、お互い様だろ？」
「焰真はまだ、慣れてないだけ・・・戦闘以外でしょ？」
「でも手伝ってもらってる、お互い様だ」

言葉が思いつかなかったから・・・適当に・・・

「まあこれからお互い様で・・・な？」

フェイトを抱いていた・・・
フェイトの今にでも泣きそう顔を見るのに我慢できずに・・・

「え、焰真！？・・・ありがと（／／／）」
「これからも、頑張ろうな？」
「うん（／／／）」

そう言ってフェイトから離れようとする・・・

「もっともう少しだけ・・・ダメ？」

「ん？・・・ああいいけど」

こうしてフェイトも回復し、いつも通りにお仕事に取り組む
焰真とフェイトだった・・・

「焰真 修行中」

「行くぞ・・・焰刀「断」」

普段使用していない、カオスの能力武器
炎の双刀・・・焰刀「断」

「烈空断斬！！」

目の前にあるビルを斬りつけると・・・上から燃えていった
技を出しての修行中・・・

「幻想偽夢！！」

ドゴオーン!!!!

とてもLvの高い修行中そのとき・・・

「焰真・・・」

「ん？フェイトか？仕事はいいのか？」

「うん・・・もう大丈夫だよ」

珍しくフェイトがやってきた・・・

「また珍しい？何の用事だ？」

「いや、焰真の修行見てたら強くなれるかなって」

「戦ってみるか？」

「え？・・・うん！」

こうして

「行くぞ！フェイト！」

「うん！・・・負けない」

「モード GEAR戦士電童！」

手と足に回転するギアを装備し、いろんな動物型のロボを武器にする

焰真がけっこう気に入っているロボット

「行くよ・・・ハーケンセイバー！」

「波動龍神脚！！」

手のギアが回転し竜巻を前方に放った
フェイトの技と見事に相殺

「くっ！閃光雷刃撃！！」

手のギアを回転させ摩擦？っぽい感じで雷の刃で手で放ちながら
回転する

「なっ？プラズマスマッシャー！」
(Plasma Smasher)

ドゴオーン！！

「やるな・・・フェイト」

「プラズマランサー！！ファイヤー！」

「くっ？ユニコーンドリル！！」

そう叫ぶと空間の裂け目が発生し角をドリルにした馬が現れた
そして手に合体・・・ドリルになった・・・

「ユニコーンドリルFA！！」
ファイナルアタック

手のユニコーンドリルから放たれる相手を貫く竜巻
フェイトのプラズマランサーを破壊し・・・フェイトを襲う

「くっ！？これなら」

フェイトは回避に成功するが・・・

「まだだ・・・輝刃ストライカー！喰らえ！」

手に巨大な形の変化したドリルを装備しフェイトの突進
フェイトはそれを防ぎきれずに・・・

「うう！！？？」

「うおおおおー！！」

ドゴオーン！！！！

「はあ・・・はあ・・・はあ」

「さすが・・・フェイトだな・・・これで終わりにするか」

「真・ソニックフォーム・・・これが私の全力だよ」

「そうか・・・フェニックスエール！」

電童に枝のような翼が装備され・・・魔力が見る見る溜まってい

「はああああー！！」

「速い！？だが・・・」

ガキイイーン！！

キイイーン！！

フェイトの剣と電童の翼がぶつかり合っている
お互い速いがフェイトには体力があまり無く

「くっ!?!」

「終わりだ! フェニックスエールFA!?!」
ファイナルアタック

翼から放たれる七色の光がフェイトを襲う!

「きゃあ!」

ドゴォー————ン!!!!

「ふう〜俺の勝ち・・・だな」

「負けちゃった・・・あはは」

「まあこれから頑張って強くなるうな・・・」

「うん!」

こうして新たな誓いを立てた焰真とフェイト

原作通りに進んでいない世界・・・どうなるのだろうか?

十話 悩み（後書き）

作者「いろいろ・・・ごめんなさいm - - m」

焰真「・・・・・・・・」

作者「更新も遅く・・・こんなのフェイトじゃない！ですw」

焰真「馬鹿者がああああ！」

作者「ぎゃああああ！！！！すいませんm - - m」

焰真「・・・なんて可哀想な奴だ・・・」

作者「TOT・・・ウルウル」

焰真「どうしようもないな・・・」

作者「ううゝダメダメだけど頑張るもんゝそれでは」

作者「皆様からの評価・感想待ってますm - - m」

作者「駄文ですが・・・次回もよろしくです」

十一話 駆ける二つの閃光（前書き）

原作に出てこない敵

その敵に勝つには今の實力では足りない

フェイト達は訓練の毎日・・・

焰真は考えていた・・・

十一話 駆ける二つの閃光

「新技……ないかなあ」

（マスター新技とは？）

（フェイト達に、いい新技と教えたいが……思い浮かばない）

（頑張ってください……）

原作に出ない敵は想像以上に実力者だ

今のフェイト達も十分強いが……修行が必要だ

「ん？敵襲か……行くか！」

いつもながらのガジェット、数はまあまあ

さあ……行くか！

～戦闘中～

「多いな～エデン！」

(了解SET UP!)

「モード フリーダム行くぞ!」

二つの銃から放たれるエネルギー弾で次々とガジェットを大破していく焰真

しかし、敵の数は多く、なかなか減らない

「くっ・・・疾風迅雷!」

高速移動して残像を残し、残像からエネルギー弾を放つ技

「多いな・・・阿修羅・解!」

高速で振動するバースト粒子を集合させたオーラを剣のような形にまとめ、振り回して攻撃する技。 木すらも蒸発させる程の威力がある。

「うおおおお!!」

ドゴォーン!!

ガジェットは阿修羅・解の攻撃に次々大破していく
しかし、まだ、かなりの数居る・・・

「なら! やさかにのまがたま 八尺瓊曲玉!」

ドドドドドド!!!!

無数の光の弾丸を発射する。 かなりのガジェットを大破した・・・

・

（マスター後方より反応です！）

（いつもの戦闘機人か？）

（その通りです。」

「神童焰真・・・あなたを殺します」

「いつものセリフだな・・・実力の差が分からないか？」

「メタルコート・・・。」

相手の体が銀色に輝いた・・・

メタル・・・硬そうだな・・・

「神火 不知火！」

両腕から二本の火の槍を飛ばすが回避された・・・

「はあああああ！！！」

「くっ！？」

相手の蹴りを腕でガードするが・・・硬い！

鋼か・・・

「ふっ・・・鬼気“九刀流 阿修羅”」

「なっ？・・・なんという気迫だ」

「行くぞ・・・阿修羅 魔九閃まきゆうせん！！！」

「九刀流」状態で激しく回転しながら敵を斬り刻む。

「くうう！？」

回避されたがメタルコートにいくつか傷をつけることに成功

「鋼再生!!」

「なっ? 傷が・・・再生したか・・・」

敵のメタルコートは元通りに再生したのだ・・・

「再生か・・・ユニコーンドリル!」

ユニコーンドリルを召喚し上に乗る・・・そして

「行くぞ!・・・ベルレ フォーン 騎英の手綱!」

あらゆる乗り物を御する黄金の鞭と手綱。

単体では全く役に立たないが、高い騎乗スキルと強力な乗り物があることで真価を発揮する。制御で きる対象は普通の乗り物だけでなく、幻想種であっても、この宝具でいうことを聞かせられるようになる。また、乗ったものの能力を向上させる効果も持つ宝具。

ドゴオーーーン!!

「やったか・・・?」

「まあ・・・まだだ・・・」

相手の鋼の腕は吹っ飛んでいた・・・今の突進に耐え切れなかったのだろう

ユニコーンドリルを戻し・・・二つの銃を構える

「鋼・・・再生!!」

「っ？腕まで再生か・・・やっかいな相手だ」

「行くぞ！！はあああああ！」

「くっ！？」

相手の突進を難なく回避する焰真・・・

「バリディン騎士の誓いの剣！」

銀色の輝く騎士の剣・・・相手に斬りかかる

「はあああ！」

「くっ！斬れると思うな！」

バシュ！

相手の腕は吹き飛び・・・もう一撃斬ったが回避された・・・

「くそ！鋼再生！」

「またか・・・」

「アイアンバースト！！」

いきなりの砲撃魔法、銀色のデイベインバスターだな・・・

「リバースバスター！！」

焰真が使用出来る数少ないオリ技
相手の砲撃魔法を反射する技

「なっ！？」

ドゴォーーン！

反射してきた自分の砲撃に反応出来ず直撃した・・・

「どうだ？自分の技は？」

「く・・・うおおお！」

ガキイン！

相手の攻撃を止めたのは？・・・フェイト！？

「フェイト？何故ここに？」

「遅いと思ったから来たの・・・」

「すまん・・・斬つても再生するから苦戦中だ」

「そうには見えなかったけど・・・」

確かに・・・砲撃で終わらせればよかったのか？
跡形も無く消し去るような・・・

（フェイト聞こえるか？）

（どうしたの？）

（フェイトも来た事だし・・・ある技を試したいんだ）

（え？いいけど・・・）

～説明中～

（ってことだ？いいか？）

（かなり無茶だけど・・・やってみるよ！）

「ん？・・・なんか相手の姿が変化してるぞ・・・」

「大きくなってる・・・」

「貴様らが攻撃してこないから・・・もう終わりだ」

アニメのように説明中に何もしいわけ無いか・・・
世の中甘くないな・・・

「行くぞ！ ドラグーンウイング起動！」

「真・ソニックフォーム！」

・・・その刹那

「っ！？居ない？」

二人の姿は消えた・・・

ズバアアン！！

気配無く・・・突然体に傷がついた・・・巨大化して5mぐらいの
姿の鋼の巨人に・・・

ズバアアン！ズバアアン！

「ぐうう！！くそ！」

焰真とフェイトは光速移動しながら攻撃している
目に見えない速さで動いていて相手も反応できない・・・

ズバアアン！

「くそおお!!」

腕を振り回しても当たらない・・・動いても斬られる
二人の姿を確認出来ない・・・

「ツインバード・・・」

二人の姿が見えたが・・・刹那・・・消えた

「ストラアイク!!」

ドゴォーローン!!

「なっ?馬鹿ば・・・」

体がバラバラになっていて核が破壊され再生不可能・・・
焰真とフェイトの勝利・・・

「疲れたよ・・・」

「お疲れ様フェイト・・・戻るか・・・」

〽機動六課〽焰真自室〽

「今日も疲れた・・・入っていいぞ」

「お、お邪魔します・・・ノックもしてないのに・・・」

なんとなく気配でわかった・・・

フェイトとの技ツインバードストライク・・・

一人でも倒せたが、やはり二人のが楽だ

「焰真、明日のお休み暇？」

「ああ・・・寝る予定だけど・・・」

「いつしよに街に行かない？」

・・・なんだってええ

フェイトと街にですか？・・・荷物持ちな予感がする・・・

まあ行くか・・・

「ああ・・・いいけど」

「やったーんじゃ明日ね」

フェイトはご機嫌な様子で部屋から出て行った・・・

「荷物持ち・・・つらいな」

フェイトとの技も決めてフェイトとのお出かけも決定した焰真
・・・次回フェイトとお出掛け・・・

十一話 駆ける二つの閃光（後書き）

作者「いいなあ〜いいなあ〜」

焰真「五月蠅い！！くらえ！」

作者「ガハア！」

焰真「更新もノロノロしようて・・・」

作者「・・・m - - m」

焰真「まあいい・・・頑張れ」

作者「あい・・・それでは！」

作者「皆様からの評価・感想待ってますm - - m」

作者「駄文ですが・・・次回もよろしくです」

外伝2 襲撃！黒騎士（前書き）

更新遅れて・・・すみませんm - - m
宿題やら何やら・・・忙しい><

機動六課の、とある一日
突然敵の襲撃・・・

外伝2 襲撃！黒騎士

「今日も忙しいな・・・」

ガジェットでは無い敵反応

黒い騎士？のような感じの敵さんらしい・・・知らないな
とにかく敵らしい・・・

「ここら辺のはず・・・」

「黒雷突進！！」

「なっ！？」

不意打ち・・・馬に乗った黒い騎士が雷を帯びて
突進してきた・・・なんとか回避に成功する焔真

「危な・・・お前が黒騎士か？見た目的にそうだな」
「・・・空間の歪み・・・消す」

空間の歪み？俺がか？よく分からんことを言うな

「雷帝黒進！」

黒い騎士は再び、焔真に向かって突進

見た感じと技的に雷の技を使用してくる・・・

「神羅天征」
しんらてんせい

斥力を自由自在に操る。全身から放つ、手から放つなど使い方も
色々。但し連続使用できず、最低5秒間のインターバルを作ってし

まっ。黒騎士は吹き飛ばされた

「うぐう！・・・まだだ・・・」

黒い騎士は大きな槍みたいな感じの武器に雷を溜めて・・・

「黒雷爆砲！！」

「カオス・・・黒刀〱罪・・・無罪！」

黒刀〱罪の防御技 無罪で相手の魔力を打ち消した
無罪は相手の技の魔力を打ち消す・・・この世界では
凄く強い技

「くっ・・・はああああ！！」

「断罪！」

ドゴオーーーン！！

捨て身で突進してきた黒騎士に焰真の技が直撃したが・・・

「この鎧は碎けんぞ・・・」

「見た目に合って硬いな・・・だが！破罪！！」

破罪・・・鋼をも碎く斬撃 威力も大きいが
隙も大きい技

「隙だらけだ・・・黒雲雷撃！！」

「六幻・・・うおおおお！」

日本刀のような刀、六幻で雷を防いだ

アクマ用だが・・・行けるだろう

「二幻　・はつかとつらつ八花螳？！」

目に見えないほどのスピードで相手の懐に入り込み、六幻で8回斬りつける技。攻撃相手に八つの傷跡（放射状）を刻みつける。

「さすがに硬いな・・・」

「その程度か？黒雷馬！！」

黒い騎士の乗っている馬の形が変化し
騎士に合体した・・・さらに硬そうになった鎧・・・

「ちっ！・・・破罪！」

「甘い・・・黒雲雷撃！！」

ドゴオーーン！！

見事な相殺・・・技の威力も上昇し
防御面でもパワーアップしている

「カオス・・・モード　瞬刃しんぺ風」

（了解！モード瞬刃しんぺ風）

（行くぞ！・・・）

「そんな薄い刀で斬れると思うな・・・」

「やってみれば・・・分かるさ」

「戯言を・・・うおおお！！」

「・・・風神一閃」

その刹那・・・

「ガハアア！！我が鎧が！？」

焰真が刀を横に速く振っただけで
黒騎士の鎧は少し碎けたのだ・・・

「バ、馬鹿な・・・雷帝黒進！！」

「空間六閃！！」

ガキイイン！！

焰真、素早い抜刀術で黒騎士に六つの傷跡を残した・・・

「な・・・馬鹿な・・・我が鎧が・・・」

「そろそろ・・・チエックメイトだ」

「馬鹿なああああ！！」

我を忘れ突進してくる黒騎士・・・

「幻想一閃！！」

刹那の抜刀・・・相手に当てていないが斬ることが可能
魔力や魔術なども斬ることが出来る

「我が・・・敗れる・・・この世の歪みにだと・・・」

「チエックメイトだ・・・」

黒騎士は真つ二つになり・・・砂のようになり
散っていった・・・

↓機動六課↓焰真自室↓

（俺が歪み・・・分からんな）

（マスターがこの世界に来て何かあったにでしょうか？」

黒騎士は焰真をこの世の歪みと言った・・・

この世界に転生してきたことで・・・何があったんだ？

（殺す前に聞いておくべきだったな・・・）

（たぶん話してくれませんよ）

（また敵は多いな・・・）

「ねえ↓焰真！」

「なっ！？フェイトか・・・どうした、そんな大声で」

「さっきから6回ぐらい呼んでるけど・・・」

気付かなかった・・・

「どうしたの？悩み事？」

「いや・・・大したこと無い」

フェイトには関係の無い話・・・
歪みは俺だ・・・迷惑をかけれん・・・

「大したことのような顔してるよ？」

「・・・」

沈黙・・・突然フェイトが自分の膝へ焰真引き寄せた

「なっ？フェイト？」

「話してよ・・・悩み事なら聞くよ？」

「ふっ・・・フェイトには隠しても無駄だな・・・」

フェイトは心配そうな顔をして焰真の頭を撫でながら聞いてくる
焰真はフェイトに

黒騎士の言った言葉・・・やらについて説明した・・・

〈説明中〉

「・・・って事だ」

「焰真が、この世の歪み？なんか難しい話だね」

「俺がこの世の邪魔者みたいな感じかな？」

そんな感じなのかな？黒騎士は俺を倒そうとしてたし・・・

「焰真は邪魔じゃないよ・・・私を助けてくれるし・・・いろいろと・・・」

「・・・ありがとう、そう言ってくれと安心してよ」
「うん！」

焰真はフェイトの言葉と頭を撫でられている感じで
安心していた・・・

「少し寝ていいかな？フェイトの膝気持ちいいからさ・・・」
「おやすみ焰真・・・」

気分的に甘えたい気分だったのか・・・
焰真は・・・すぐに寝てしまった・・・

外伝2 襲撃！黒騎士（後書き）

作者「なんじゃ！あの甘い感じは!？」

焰真「お前に言われると・・・イライラする」

作者「申し訳ありませんでした・・・m - - m」

焰真「分かれば・・・よろしい」

作者「更新が・・・遅いな・・・」

焰真「分かってるならやれよ・・・」

作者「あい・・・それでは!」

作者「皆様からの評価・感想待ってますm - - m」

作者「駄文ですが・・・次回もよろしくです」

十二話 聖騎士の力（前書き）

更新おくれました><

宿題も終わってきたのでwこれから更新していきますw
よろしくですm - - m

約束通り フェイトと外出
お買い物らしい そして・・・

十二話 聖騎士の力

フェイトと街で買い物

午前中は、思った以上に満足した買い物が出来た
今フェイトの服を選んでる

「焰真、似合ってるかな？（／＼／＼）」

「ああ・・・似合ってるぞ・・・似合わない服あるのか？」

「あ、ありがと（／＼／＼）」

こんな感じで焰真とフェイトは買い物中
時間も時間なので六課に帰ることにした・・・

「今日は、ありがとなフェイト」

「付き合ってくれて、ありがと焰真」

（マスターもの凄い魔力反応です！）

（六課の皆は気付いてないぜ！）

（魔力反応？敵か？）

（動きが見られません・・・）

（六課の戻ったら行ってみるか？）

「どうしたの？焰真？」

「ああ・・・少し魔力反応あったから・・・後で調べてみる」

「一人で行くの？」

「一人でも大丈夫みたいだ・・・何かあったら頼む」

「うん！」

もの凄い魔力反応？・・・黒騎士か？
空間の歪みを消す者達なのか・・・？

焰真は六課に戻った後・・・反応の場所へ向かった・・・

「反応はあるがな・・・エデン！ドラグーンウイングで探せるか？

（YESマスター）

「頼む・・・」

焰真が言うとうイングが飛んでいき探りはじめた
動いてない・・・物？ロストロギアなのか？
少なくとも原作じゃないな・・・

（マスター発見しました）

（行くか・・・）

焰真は反応の場所へ向かった・・・そこにあるのは

「指輪？・・・綺麗な指輪だ」

指輪だった・・・大きな緑色と銀色の石がある・・・
宝石じゃない・・・魔力反応がある・・・

「証を渡せ・・・」

「っ！？誰だ・・・証？なんのことやら」

「騎士の証を渡せ・・・貴様には関係無い物だ」

騎士の証？この指輪が？ロストロギアは六課に持って帰る
・・・にしても騎士？証・・・わからん

「・・・渡さないのなら・・・殺す」

そう言う相手ネックレスが輝きだした・・・。

「古よりある 大空の覇者 ヴァルイーゼよ
我に力を・・・」

ピキーーーーン！！

相手の男は呪文？みたいなのを唱えると
羽のはえた・・・白く青い騎士みたいな姿になったのだ

「かつこいいな・・・それ」

「証を渡す気になったか？」

「全然ならん・・・」

（我が主よ・・・）

（っ！？誰だ・・・まさか・・・指輪か？）

（その通りです・・・我が主、我が名はグラディウス）

（我が力・・・貴方に・・・）

・・・グラディウス？知らないな
騎士ってことなのか？・・・やってみるか

（いけるのか？）

（行けます・・・我が主）

「騎士の力か・・・お前は俺の実験台だ・・・」
「・・・殺す」

指輪をはめると・・・頭に文字が浮かんできた

「古より煌く 聖なる騎士 グラディウス
我に力を・・・」

ピーキーーーーン！！

焰真の姿は・・・銀色と金色がバランスよくある鎧に
光が伸びる剣 銀色の鏡のような盾の騎士だった・・・

「貴様・・・まあいい空の槍で貫いてやろう」
「凄い力だ・・・行くか」

（我が主 ここに騎士の能力を送ります）

煌きの聖騎士 グラディウス

武器 聖光剣 グラディウス

盾 白銀の盾

地上SSS 空SSS 海中S

技 多数

（なるほど・・・強いな）
（我が主・・・来ます）

「貫いてやる・・・」

「伸びろ！光の剣！！」

焰真が剣を相手に向けると光の剣が伸びていった

「くっ！まだだあ！天空破貫！」

ドゴオーン！！

「貴様あ！騎士の力を・・・空弾槍！」

無数の槍が飛んてくる

空中での戦闘重視した騎士か・・・

「集え！剣よ！グラディウスアーツ！」

12本の剣が焰真の周囲に展開され・・・飛んて行く

「数じゃ負けたか・・・だが」

ドゴオーン！！

「くっ・・・はあああ！！」

「うおおおお！」

ガキイン！

カキイン！

「天空槍雨！終わりだあ！」

「行くぞ！煌光聖破斬！」

空から落ちてくる槍を巨大な光の剣が斬っていく
相手は避けきれず・・・

「なに？ウガアアア！」

「まだだ！煌け！我が剣よ！天をも斬り裂く！光の剣！」

（主 チャージ完了）

（ここ周辺に人の気配は？）

（ありません主）

（よし・・・いくぞ）

聖光剣グラディウスの光の剣が空高く伸びていく
巨大なビルのように・・・

「煌きの騎士の奥義・・・その身に刻め！」

「くつくそ！我が敗れることなど！」

「エターナルパラディン・ノヴァ煌く騎士の天光！」

「我がアアアアア！」

ドゴオーーーン！

「終わったか・・・」

光の剣を直撃し光になった騎士・・・

（我が主・・・あの光見えますか？）

（ああ・・・あれがどうした）

（剣を振り上げてみてください）

（ああ・・・）

焰真が剣を振り上げると
光が鎧の中に入っていた・・・

（相手の騎士を倒すと現れる経験値のようなものです）

（溜めるとどうなる？）

（我が真力の解放と主の能力の上昇です）

「戻るか・・・」

こうして六課に戻って、皆に説明をしたのだが・・・

「・・・シグナム そんな目で見えるな」

シグナムが輝いた目でこちらを見ている

「・・・言わなくても分かるな？焰真」

「・・・俺の選択肢は・・・」

1、やろう！

2、まあやってやろう

3、しょうがないな・・・

（おい！作者！）

（ご武運をお祈りしていますw）

「しょうがないな・・・」

「本当か!？」

「ああ・・・やるぞ」

「ああ!!」

「ねえ〜フェイトちゃん、どっちが勝つと思う?やっぱり焰真君かな?」

「うん、シグナムも強いけど・・・実力の差があるからねえ・・・」

「シグナム〜頑張れ!」

「ヴィータちゃんはシグナムが勝つと思うの?」

「まあ・・・焰真じゃねえ〜か?」

こんな感じで、どちらが勝利するか予想されている・・・

珍しく皆練習休憩しても模擬戦の見学

「先ほどの・・・グラディウスで頼むぞ」

「ああ・・・分かってる」

（いいか?短時間で2回もやって）

（大丈夫です我が主、現在一日12時間行動できます）

（余裕だな・・・）

（やるか・・・）

「古より煌く 聖なる騎士 グラディウス
我に力を・・・」

「・・・それが聖なる騎士か」

「ああ・・・いくぞ、シグナム」

「烈火の将 剣の騎士シグナム・・・参る！」

「煌きの聖騎士 グラディウス・・・行く！」

ドンツ！

二人が同時に突っ込んだ もの凄い速さ

ガキイイイン！！！！

「くっ！」

「その程度か？シグナム！」

「うおおおおお！！！」

ガキイイイン！

つばぜり合い・・・シグナムが負けているが
見る限りに差は無いが・・・

「レヴァンティン！」

ガシャン！ガシャン！

「火竜一閃！」

「くっ！伸びる光の剣！」

ドゴォー——ン！！

「まだまだ！紫電一閃！」

「パラディン・ブレイク！」

お互いの技と技のぶつかり合い
少しでも気を緩めれば・・・終わる

「くっ！うおおお！」

「降り注げ！聖なる剣達よ！メテオ・グラディウス！」

無数の細い光の刃が雨のようにシグナムに襲い掛かる
シグナムは、少しは当たるが・・・致命傷ほどの傷はなかった

「さすがシグナム・・・」

「はぁ・・・はぁ・・・くっ！」

「ここに集え・・・光よ・・・パラディンバスターー！！」

「砲撃だと！？」

ドゴォー——ン！！！！

予想もしない砲撃にシグナムは回避出来ず・・・そのまま直撃
焔真の勝利・・・

「終わった・・・フェイト・・・また今度な」
「うん！」

（マスターお疲れ様です・・・）

（忙しいなマスターは！頑張れ！）

（ああ・・・）

こうして新たな力を手に入れると同時に
新たな戦いに参加する焰真だった・・・

十二話 聖騎士の力（後書き）

焰真「更新遅くないか？」

作者「大丈夫！宿題は終わらせた！これから更新していきます！」

焰真「いろいろ乙」

作者「焰真君視点ばつかなあゝ他のキャラ口調が・・・」

焰真「乙」

作者「頑張ろう！wそれでは！」

作者「皆様からの評価・感想待ってますm - - m」

作者「駄文ですが・・・次回もよろしくです」

十三話 軍勢襲撃（前書き）

突然の襲撃

大量のガジェット・戦闘機人量産

六課ピンチ・・・

十三話 軍勢襲撃

「戦闘ばっか・・・疲れた」

「焰真！そっちは・・・頼むね」

「ああ・・・行くか」

もの凄い量のガジェットが襲ってきた・・・
またしても・・・いきなり戦闘開始か・・・

「超電^{レールガン}磁砲！」

電磁加速をつけたコインを飛ばすが・・・威力はあっても
数は倒せないか・・・

「行くぞ！カオス瞬刀〜風〜」

（OKマスター！）

「天魔七閃！」

スパアン・・・

その場で抜刀・・・何も無く見えるが刀を鞘に収めると・・・

ドゴォーーン！！

「零閃〜九閃・・・耐え切れるかな？ガジェットども・・・」

瞬刀〜風〜

カオスのモードの一つ

零閃く九閃 一つの閃で多数の技がある

基本は抜刀での戦闘が多い

「・・・風神一閃！」

ガジェットに耐え切る術は無く・・・次々大破していくガジェット達

しかし・・・

「戦闘機人か・・・今日は多いな」

「貴方を・・・殺す」

「いつも通りのセリフだな・・・新の力の試しだ」

（グラディウス？いけるな）

（いけます・・・我が主）

「古より煌く 聖なる騎士 グラディウス

我に力を・・・」

「それが・・・貴方の新能力ですか？・・・行きます」

「集え！光よ・・・パラディンバスターー！！」

ドゴオーーーン

不意打ちだっただろうか？まああんなにも居るんだ・・・

「さすがに多いな・・・」

煙が晴れると、そこまで減っていないのが一目で分かり
全員やる気満々で武装していた戦闘機人達

「少し・・・無理をするかグラディウス解除・・・エデン！」

(了解 SET UP)

「フリーダム・・・行け！ドラグーンウイング達！」

焰真が言うとドラグーンウイングが相手のほうに飛んでいき

「ドラグーンバースト！」

ドラグーンウイングの先から5つに分かれるエネルギー砲が発射
され

ガジェットと戦闘機人達にダメージを与える

「まだ居るか・・・ドラグーン・レイ！」

ウイングがこちらに展開され・・・雨のようにエネルギー砲を撃
つ技

さすがにこれなら・・・！？

「・・・誰だ？お前は」

「貴様は倒す者だ・・・」

「そういうセリフは相手と自分の実力の差を見極めてから言え」

煙が晴れると一人の男が立っていた・・・

「我が名はガイン・・・貴様を倒す者だ」

「・・・話なら六課で聞くけど・・・」

「ふっ・・・炎烈爆破！」

「モード ソウルゲイン！」

ドゴォーーン！！

敵の鎌のデバイスから炎の弾が発射され、こちらに近づき爆発したが・・・

その場にいたのは・・・紅い目に蒼い装甲・・・ソウルゲイン接近戦型のロボだ

「青龍鱗！」

「烈火砲弾！」

青いエネルギー破と赤き炎の砲弾がぶつかり合うが
青龍鱗のほうが上がったのか砲弾は敗れソウルゲインの技がガイ
ンに向かう

「くっ！火陣盾！」

「玄武剛弾！」

ソウルゲインの両手が回転し相手に向かって飛んでいく
相手の盾を破壊し・・・

「なっ！ぐああああ！」

「その程度か・・・終わらせる」

肘にある針のような物が伸びて
ソウルゲインが高速移動を始める

「・・・舞朱雀！でええええええ！」

ズバァン！・・・

「ガハア！・・・くそ」

「俺を倒すなら・・・もつと修行してこい」

ガインに勝利し・・・他の皆もガジェットを撃破し
任務完了・・・

↓機動六課↓焰真自室↓

「ふう〜疲れた・・・」

「お疲れ様、焰真」

「ああ・・・フェイトか・・・お疲れ様」

仕事の終わりと同時にフェイトが入ってきた・・・

「はいっ焰真、シャマルから・・・疲れも吹き飛ぶ栄養剤だっ
て・・・」

「・・・嫌な予感しかないんだけど・・・まあありがと」

疲れも吹き飛ぶ？栄養剤で？意味が分からん・・・
焰真が飲んでみると・・・

「・・・体が熱い・・・意識が吹き飛ぶ？栄養剤か？これ」
「シャルが・・・焰真大丈夫？」

・・・やばいぞ・・・意識が、フェイトに突進しそう

「なあ〜フェイト・・・少しだけ」

「きゃっ！？どうしたの焰真（／／／）」

焰真が我を忘れたのか・・・フェイトをベットに寝かせ
抱き枕にしていた・・・

「仕事の褒美つてことで・・・」

「えっ焰真！？えええ・・・（／／／）」

「うう・・・ダメか？」

「はうう・・・（／／／）」

その後焰真は眠りにつき・・・1時間後に目を覚ました
フェイトの顔は真っ赤で湯気が出るほどだった・・・

「m - m すまん」

「い、いいよ栄養剤のせいだし・・・ゴニョゴニョ（／／／）」

シャル・・・後で拷問の時間だ・・・

「なんてお詫びをすればいいか・・・」

「んじゃ・・・今度私が抱き枕にしていいい？（／／／）」

「・・・はあ？フェイトも栄養剤飲んだのか？」

「今なんて・・・抱き枕にしていいい？って言った？」

「うん・・・（／／／）」

「・・・フェイト寝ぼけてる？・・・その様子は見られない
マジで言ってるのか・・・嫌じゃないけど

「俺なんかでいいのか？本当に」

「うん！・・・焰真がいい（／／／）」

こんな感じで変な約束をしてしまった焰真
いろいろと今後の行方が気になる焰真だった・・・

十三話 軍勢襲撃（後書き）

作者「すんませんでした！！！！m・・・m」

焰真「・・・分かってるよな？（ニコッ）」

作者「命だけは・・・お許しをおおお！」

焰真「とつとと逝けええええ！！！」

作者「ぎゃああああ！と、それは置いていて」

焰真「置いてくなよ・・・」

作者「リリなの以外でも転生物やりたいなんて・・・w」

焰真「同時進行ってか？お前には無理だ」

作者「・・・考えてみよ」

焰真「ダメな作者だ・・・」

作者「まあ今はこつち頑張らないと！それでは！」

作者「皆様からの評価・感想待ってます！m・・・m」

作者「駄文ですが・・・次回もよろしくです」

キャラクター紹介②（前書き）

キャラクター紹介その2です

焰真とデバイス 騎士の力の紹介です

キャラクター紹介②

主人公

神童焰真 17歳 184cm 58kg A型

機動六課 ライトニング隊 フェイト補佐官

髪の毛の色 黄色 瞳の色 紅色

魔力変換資質 炎熱・電気・凍結

魔導師ランク EX以上

ミッド式 ベルカ式どちらでも無い変わった魔法使用可能

ミッド式&ベルカ式も使用可能

バリアジャケット

黒い服に黒いズボンとにかく黒

FF8のスコール・レオンハートと同じ感じのデザイン

好きなもの 自然 武器 旨い料理 アニメや漫画

苦手なもの 計算 辞書 など

転生前と転生後で歳に変化無し

普段からはあまり人と話さず一人で居ることが多い

転生前に武術を少しやっていて運動神経は良い

頭も悪くは無い、デバイスは二つ持っている

煌きの騎士 グラディウスもいる

能力 「神技創造」 自分想像した武器・技・魔法・召喚魔法使用可能

「幻想能力」 転移・錬金術・空間移動・など使用可能

「超変身」 想像した物や生命体に変身可能
デバイスの真の力の解放可能 カオスとエデンのみ

カオス

神童焰真のデバイス 携帯時黒いピアス
人のような意思を持っている（礼儀知らずな性格）
多数の武器の変形可能である

黒刀「罪」

日本刀が黒くなったような刀切れ味は良く名刀とも呼べる一振り

光剣「破」

光の大剣横にも少し長く光の剣を伸ばすことも可能

焰刀「断」

赤き刀身の双刀 刀身を触ると熱い

魔槍「滅」

黒い槍 見た目はドラゴンクエストのメタルキングの槍 いまだ出ていない

瞬刀「風」

薄い刀身で長さは、そこまで長くなく 短くも無い 零九までの型がある

エデンと同じ焰真のデバイス敬語や礼儀知らずのデバイス
カートリッジの装填方法
無限発装填のリボルバータイプ

まだ登場していない カオスLV4真力解放後 混沌神カオスLV5

エデン

神童焰真のデバイス 携帯時は白いブレスレット
人のような意思を持つ（礼儀正しく優しいタイプ）
モードがいくつかある

モード ドラグーン

初期状態のモード一番よく使用されている
二つの銃を持ち5枚のドラグーンウイングと言うなの羽のような物
がある

見た目はストライクフリーダムガンダムのような感じ

モード アルテマ

一撃の攻撃に力を使うモード

大きな3枚の天使の羽に砲撃用の銃

モード エデン

最強の状態 ドラグーンの見た目で両肩に砲撃用の砲台があり
ミーティアのようなのも装備している

カオスと同じ焰真のデバイス 礼儀を心掛けている
カートリッジの装填方法

無限式オートマティックのマガジнтаイプ

まだ登場していない エデンLV4真力解放後 神楽園エデンLV5

ヴァルキリー

神童焰真のデバイス カオスとエデンの合体1つ目のリミッター
金色に少し白い筋のある鎧に金色のマント

ヴァルキリーリミッターがある LV4 LV5

武器はヴァルキリーソード 接近戦・長距離戦どちらも得意
合体リミッター

ヴァルキリー・ オーデイン・ ファイナル

オーデインとファイナルは、まだ謎

グラディウス

神童焰真の手に入れた騎士の力、普段は指輪の姿をしている

「煌く聖なる騎士」の名をもつ騎士で

武器は 聖光剣グラディウス 光で出来ている剣 伸ばしたりも出来る

盾 白銀の盾 鏡のような盾で一定以下の威力の技なら反射できる
変身時の掛け声は

「古より煌く 聖なる騎士 グラディウス

我に力を・・・」である

騎士の中でも上位の能力の騎士

キャラクター紹介〜2〜（後書き）

作者「キャラ紹介2でした」

焰真「強いな・・・けっこう」

作者「アクセス（PV）は35000!? だっ たっ け? ですw」

焰真「覚えるよ・・・」

作者「ありがとうございますm・・・m」

焰真「この調子で頑張れ・・・」

作者「それでは!」

作者「皆様からの評価・感想待ってます! m・・・m」

作者「駄文ですが・・・次回もよろしくです」

十四話 究極焔炎（前書き）

焔真は新たな勢力との決戦に向けて
頑張って修行中

十四話 究極焔炎

「行くぞ！焔真！」

「来い！シグナム！」

現在シグナムと練習中・・・勝つまで戦うて・・・
無理言わないでシグナム・・・

「紫電一閃！」

「秘剣・・・燕返し！」

スパパパン・・・

「カハア！くっ！はああああ」

「天の鎖よ！」
エルキドゥ

頑丈な鎖で動きを封じ・・・

「約束された勝利の剣！」
エクス
カリバー

強大な一撃！！

ドゴオーーーーン！！

「ふう～疲れた・・・」

シグナムは・・・気絶か、やりすぎたかな？
これで諦めてくれるといいけど・・・な

「お疲れ様、焰真君」

「ああ・・・なのは、そっちはどうだ？」

「こっちの調子もいい感じだよ」

騎士達と遭遇も考えられる・・・

なのは達も戦闘するかもしれない・・・強くなってもらわないとな・・・

「焰真さん！」

「ん？どうした？エリオ」

「焰真さんに必殺技ってあるんですか？」

（（（・・・））） 焰真・カオス・エデン

必殺技・・・考えたことも無かった・・・

（カオスとエデン・・・あるか？）

（マスターが考えればありますよ）

「焰真さん！あるなら、ぜひ！見せてください！」

「んまあ・・・やってみるか」

「焰真君の必殺技・・・あの十字架？」

「ああ、違うと思う・・・」

こうして・・・

「必殺技か・・・しかも、こんな広い場所って・・・期待しすぎだろ」

「焰真さん！頑張ってください」

（けっこう魔力消費するかもしれん）

（了解マスター）

（ヴァルキリーのほうでやる）

「なのは達危ないから離れててくれ・・・」
「ほゝそこまでの技か」

シグナム・・・プレッシャー考えようよ・・・

「まあやるさ・・・たぶん・・・熱いぞ」

「炎の必殺技ってことですか？」

「ああ・・・」

「ヴァルキリー！行くぞ！」

焰真はヴァルキリーをSET UPさせ

「究極の炎　すべてを滅する　無の火炎
天をも焦がす　幻想の焰！」

アルティメットレア
「究極焰炎！！」

ドゴォoooooooooooo！！

目の前は何も無かったかのようなクレーター
地面は燃えている・・・

「また焰真との差が開いたね……練習頑張ろう」

、数日後、

「ありがと、フェイト……手紙か」

「ああ……」

内容は
・
・
・

神童焰真殿へ

貴方を、この世で実力トップ7位以内の実力があると言うことで七騎士の称号を与えます・・・異名のような物は・・・

「聖なる断罪者 幻想の王」です

後日、七騎士で会議がありますので・・・

よろしく願います、ランクは現在2位です

「かつこいいな・・・本気出せば1位だな・・・たぶん」

（決められましたが・・・いいのですか？）

（まあいいだろ・・・）

「七騎士か・・・面白そうだな・・・」

七騎士の称号を手にし・・・さらに謎が深まる
この世界・・・どうなるのか？

十四話 究極焰炎（後書き）

作者「・・・・m - - m」

焰真「遅かったな・・・」

作者「すいません><」

焰真「怒るのも疲れた・・・」

作者「頑張ります・・・wそれでは!」

作者「皆様からの評価・感想待ってます! m - - m」

作者「駄文ですが・・・次回もよろしくです」

七騎士と今後（前書き）

すいません><

突然成り行きで出した・・・

七騎士の紹介です

七騎士と今後

七騎士とは・・・

この世の頂点に立つ七人、国のあらゆる元を決めたり、悪を切り裂く騎士でもある

戦闘能力ランキングがあり 七騎士の中でも順位があり1位が一番偉い

実力・・・実力のある者こそが正義の世界・・・

〈七騎士紹介〉

現在1位 「最強を求める旅人 天地覇者」 グランツ・デイド 男

七騎士だが、会議にも参加せず旅を続ける者190ほどある身長で見た目は長い金髪に赤い瞳

戦闘時以外は自由気まま流れに身を任せる性格だが戦闘時には鬼神の如く強さを発揮する 現在も最強を求めて旅をしている

現在2位 「聖なる断罪者 幻想の王」 神童焰真 男

新たに七騎士になった者 機動六課で働いており、その素晴らしき戦闘力は

今は旅に出て不在の1位以上とも言われる、無限に思える技の数底知れない実力を持っている 機動六課と七騎士の仕事をどうするか考え中

現在3位 「凍てつく神剣 冷血の騎士」 グリファス・ルーツ

冷静な思考、とある王国の騎士団長で、その凍てついた剣は大気を凍ると評判

神のご加護を信じ、策を考えるのが得意、七騎士の中でも仕事熱心なほう

少し長い青色の髪の毛に青い瞳

現在4位 「天を射抜く銃 天の女神」 女 ランベスタ・ルリ

まだ16歳にして七騎士になった才女 容姿端麗頭脳明晰とも言われる

白に少し黄色を入れたような髪の色 仕事熱心で頑張っている
天をも射抜くと言われる攻撃は、見えない場所から撃つても当たると言われている

現在5位 「大地を斬り裂く者 一刀無双」 男 村雨戦国

戦国武将かのような口調、礼儀を大事にし、いつでも全力勝負な男
髪の毛は長くポニテ？みたいな感じ その一本の刀の攻撃は 天を斬り大地を裂くと名高い

魔法は使用出きないが、魔法かのような剣技で敵を翻弄する

現在6位 「絶望の魔女 禁断の追求者」 女 クレーナ・オルム

魔法の全てを追求し七騎士になるほどの実力までたどり着いた者
茶色の長い髪の毛 日々、研究や魔法の実験をしている、実験デ

バイスを数多く持つ

焰真の技に興味津々な魔女

現在7位 「財力の王 金を求める者」 男 デイズ・バビロム

金こそ力なりと・武器やデバイスを買取り様々な兵器開発によつて七騎士になった男

戦艦、要塞、なんでもありのようで七騎士会議のある要塞の彼の私物

すべて金で解決できている

↓今後の内容↓

七騎士になった焰真、六課と離れることになり・・・七騎士の仕事に頑張る焰真

ある事件が元で、六課と七騎士は戦うことになってしまう・・・突然の七騎士任命に六課との対立・・・今後どうなるのでしょうか・・・

七騎士と今後（後書き）

作者「勢いでやってみた七騎士の少しの説明と今後についてです」

焰真「忙しいな・・・俺」

作者「まあ頑張ってくださいなw」

焰真「お前のが頑張れよ・・・」

作者「あい・・・それでは！」

作者「皆様からの評価・感想待ってます！m - - m」

作者「駄文ですが・・・次回もよろしくです」

十五話 七騎士と事件（前書き）

七騎士になって一ヶ月仕事にも慣れ

他の七騎士とも仲良くなり・・・六課から離れて一ヶ月にもなる

少しでも六課の仕事を減らそうと頑張るが・・・無理だった

そして・・・事件が・・・

十五話 七騎士と事件

「ふむ・・・会議はメンドイな」

「焰真さんが、そんなこと言っただろうんですか！今この中で一番偉いのにな・・・」

ランベスタ・ルリ・・・この中で一番仕事熱心でいろいろ教えてくれる才女だ

まだ若いのに・・・この中では、よく話すほう

「グランツが不在だから・・・お主が頑張らねば」

「まあ・・・そうだな」

村雨戦国・・・戦友で一番仲が良いかな？練習はよくする
まるで昔の人みたいで魔法をよく知らないけど・・・強い

「今日は・・・何を話すのでしょうか？」

「えっと・・・ロストログアや、なんか色々だ」

グリファス・ルーツ・・・冷血とも呼ばれ頭脳、戦闘能力ともに
高く

話せば分かるタイプかな？

「まあ機動・・・六課？だっけ？あそこが働いてるし・・・大丈夫じゃない？」

「こつちも頑張らないとだぞ・・・」

クレーナ・オルム・・・俺の使う技に興味津々の魔女
研究に明け暮れている・・・

「ははは、ワシらの中で働くのも少ないがの」

「まあ・・・違うとは言えませんがね」

デイズ・バビロム・・・金の王とも言われる・・・兵器開発ばかり
まあ色々と奢ってもらってるけど・・・

「まあ今日も終わりと・・・ルリ、調べ者だったっけ？行くか」

「はい！お手伝い、ありがとうございます！」

何やら調べものがあるそうなので・・・手伝うことに

「いや、仕事熱心だな・・・偉いもんだ」

「そ、そんなこと・・・焰真さんだつて」

俺が来る前は、ほとんど一人で頑張っていたらしい
グリファスもやっていたようだけど・・・

「でもルリのサポートがいるだろ？ありがとな・・・」

頭を撫でてみる・・・

「はう、はい（／＼／＼）」

なかなか・・・可愛いリアクションだ・・・フェイト以上かもし
れん・・・

おっと！調べもの・・・

「ん？この本じゃないか？」

「さすが！焰真さん！ありがとうございます！」

さて・・・この次は戦国と模擬戦だったかな・・・

「んじゃ戦国んとこ行って来るね・・・んじゃ」

「ありがとうございます！」

「いつも、すまぬな・・・付き合わせて」

「俺も好きでやってるし・・・いい練習になるからな」

「ふっ・・・不器用がゆえ・・・手加減出来ぬぞ？」

「俺のセリフだ・・・黒刀〱罪〱」

戦国は魔法は空飛ぶと刀に魔力を纏わせるぐらいしか出きないが・

すっごく強い・・・

「参るぞ！！うおおおお」

「行くぞ！断罪！」

ガキイイイン！

「うむ！桜・一刀斬破！」

「くっ！破罪！」

ドゴォー——ン！

「さすがだな……瞬刀、風、幻想一閃！」

「うぬ！豪破……抜刀！」

スパァン・
・
・
・
・

ゴゴォー！！

地面は地割れのように割れ・・・もの凄い衝撃波が生じる

「さすが戦国だな・・・」

「お主こそ……だが！桜・天風大蛇！」

「霸王九閃！」

スゴォー！！！！

「霸王九閃とぶつかり合つて壊れないなんて……さすがの刀だな」

「雨之村雲は我が友……。壊れはせぬ」

戦国唯一の武器……刀一本だが……とんでもない実力者

「見せよう！我が戦友よ！この一撃……しかと受け取れ！」

「受けてやろう……俺の一撃で……」

「行くぞ！大地両断之太刀！でえええええ！」

「天空零閃！」

お互いが抜刀．．．そして

ドゴォー！ー！ー！ー！

俺の後ろのほうにあった山は真つ二つに．．．地面は一直線に割れ
大地が二つに別れたかのように．．．

「今日の抜刀勝負は．．．拙者の勝ちでござるな」
「チツ．．．今日ただけだな．．．」

天空零閃の斬撃は弾かれたのか．．．さすが戦国だな

「んじゃ帰るか．．．」

「承知．．．」

「お二人とも！大変です！」

何事？と振り返ると．．．ルリが走ってきた．．．

「どうなさった？ルリ殿」

「何事だ？そんな焦って．．．」

「機動六課が聖王のなんちゃらつてのを保護してる感じみたいで我々七騎士で保護しますと

言いに言ったら即答で断られました．．．グランツさんに連絡
入れたら．．．

何やら戦争だ．．．逆らった奴は殺す！だそうです．．．」

戦争？六課と？ヴィヴィオを争奪のため？意味が分からん．．．

反対は出来んな

どうするか．．．ヴィヴィオを保護して返すのか？それでいいか．
．．．

「拙者に反論はござらん・・・即答で断るとは・・・舐められたものだな」

「お、俺もいいかな・・・戦争はあれだけど・・・」

「グランツさんが再度忠告にいつたら・・・冷静な感じで即答されたのでお怒り中です・・・」

「それで潰すか・・・短気すぎるだろ・・・」

俺がヴィヴィオをすぐ保護して終わらせるか・・・六課の面々を倒すわけじゃない

「ハオウを起動させて全力で潰すだそうです・・・」

「ぶっ！ハオウだつて？あの巨大戦艦をか！？バカだろ・・・」

「明日に行くそうなので・・・久しぶりの戦闘です！」

「喜ぶとこじゃないだろ・・・」

早めに終わらせるか・・・

こうして・・・七騎士VS機動六課になってしまった・・・

グランツが説得に来た六課の隊員を説得される前に殺し・・・六課に見せつけると

六課の皆も戦う気になってしまったようだ・・・こっちが悪いだろ・・・

早めに終わらせないと・・・大変なことになってしまう
現在起動中の戦艦ハオウの砲台の上に座っている・・・

「舐められた者だな、俺達も実力の世界なのによ!」

「グランツ怒るな・・・殺すなよ」

「焰真さんの言うとおりです! 気絶で終わりです!」

なのは達が死んだら・・・終わりだ

原作あーだこーだの話じゃなくなる・・・

「七騎士の力を世界に見せつけければ・・・今後楽になるんじゃない
?」

「神のご加護がある限り・・・負けは無いです」

「はっはは! ハオウの力見せてくれるわ!」

「拙者は無駄な殺生しないでござる・・・戦いを楽しむのみ」

皆やる気満々かよ! 気絶って言ってるし・・・ヴィヴィオの場所
は? わからん・・・

速く終わってくれ!

「んじゃ・・・てめえら! 俺の獲物横取りすんなよ!」

「俺は・・・ハオウを守るか・・・」

「バビロムと焰真さん以外は出陣ですね! 頑張りましょう!」

・・・こうして七騎士VS機動六課の戦いは・・・始まる

十五話 七騎士と事件（後書き）

焰真「どうなってんだよ！」

作者「…………勢いで…………すいません><」

焰真「……………」

作者「前しか見てません」

焰真「霸王……………」

作者「まってwまって！死にたくないよTOT」

焰真「リリカルなのはじゃないよな…………ほとんど」

作者「だ、大丈夫！…………かも」

焰真「はぁ〜ダメな作者はやっぱ駄文のみか……………」

作者「頑張りますwそれでは！」

作者「皆様からの評価・感想待ってます！m - - m」

作者「駄文ですが…………次回もよろしくです m - - m」

十六話 天空両断之太刀（前書き）

七騎士で仕事している間に・・・原作終了してしまい・・・
新たな物語・・・七騎士VS新・機動六課
今・・・始まる

十六話 天空両断之太刀

「俺の居ない間に終わったのか．．．早いな」

七騎士VS六課、俺はハオウの守備をしている．．．
バビロムと俺以外は行ってしまった．．．怪我しなきゃいいけどな

俺の知らない物語．．．楽しむか

「お主ら．．．敵か？拙者七騎士の戦国と申す」
「エリオ君．．．遭遇しちゃったね．．．」

このような子供か？拙者の相手だと？．．．舐められたものだし
かし．．．この二人．．．なかなかだな．．．

「ヴィヴィオは渡せません！行きます！」
「うむ！．．．拙者不器用がゆえ．．．手加減せぬ！」

エリオ&キャロVS村雨戦国

「実力の差・・・見せつけよう！」

「行きます！うおおおお！」

エリオは突進していく・・・フリードはすでに大きくなっており
空を飛んでいる

戦国は抜刀の構えをして・・・

「うぬ！桜・天風大蛇！」

刀を抜き一回天すると戦国の周囲に竜巻が現れて・・・

「くっ！？紫電一閃！」

「ふっ！その程度じゃ！敗れぬぞ！」

「フリード！」

フリードは炎を放つが・・・桜・天風大蛇は破れず・・・
押されていくばかり・・・

「ふむ！その歳では・・・なかなかの腕前だが・・・拙者には勝て
ん！」

「くっ！うわあああ！」

弾き返されて・・・エリオが体勢を崩してしまっ

「エリオ君！竜巻がこっちにも！？きゃあああ！」

「油断大敵でござるぞ・・・乱桜舞！」

戦国は刀に魔力を纏わせ舞うように刀を振ると斬撃が予測不能・・・
いろんな場所に飛んでくる

一つ一つ威力が高く・・・

「くっ！・・・はぁ・・・はぁ・・・強い」

「実力の差と言うものだ・・・だが手加減はせぬぞ」

「フリード！」

「甘い！極両断破！」

刹那の抜刀から放たれた斬撃にフリードは回避出来ず・・・落ち
ていく

「くそっ！うおおおおお」

「我を忘れるとは・・・甘いな・・・ふん！」

ガキイイーン！

「くっ！何故ですか？ヴィヴィオを！せつかく取り戻したのに！」

「拙者は、その子に興味は無い・・・戦いにきたのだ！ぬん！」

「かはぁ！・・・」

戦国の攻撃に耐え切れず一撃受けてしまうエリオ

「桜・一刀斬破！」

「きゃあああああ！」

キヤロは防御するも・・・耐え切れず、その場に倒れてしまう

「キヤロ！くそおおお！」

「拙者と出会ったのが運の尽きじゃったな・・・」

両者は一旦離れ・・・

「最後にしよう・・・お主に耐え切れるかな？」

「はぁ・・・はぁ・・・」

「天空両断之太刀！はぁぁぁぁ！」

スパァン・・・

ドゴォーリーン！

「えっ？・・・かはぁ！」

一瞬の抜刀・・・刀が抜かれ戦国が後ろを向くと同時に

エリオは右肩から左太ももまで一直線に斬られていた・・・深くは無い

「拙者の勝ちでござる・・・今回はな」

「くっ・・・」

エリオは力尽き・・・キャロも気絶していて・・・戦国の勝利となった

「今の子供はここまで・・・拙者も頑張らねば」

と全ての子供が強いと世間知らずが思い込みするのであった・・・

・
グランツはヴィヴィオには興味が無く・・・戦うだけで終わらせるだそうだ・・・

「この子達は・・・グランツの怒りを静めるために・・・か」

くハオウ砲台上く

「まさか・・・フェイトが来るなんてな・・・」

「焰真・・・なんで？こんな戦いするの？」

一番戦いたくない人と戦うのか・・・

「七騎士の言うことには従おうぜ・・・一応偉いんだからさ」
「ヴィヴィオは渡せない・・・取替えしたばっかなんだから」

原作の最後か・・・そりゃくなるわな・・・よく分からない組織に
渡すなんて

七騎士目立たないし・・・個人個人自由すぎて

「実力の世界だ・・・一位に従ってるだけさ・・・たぶんヴィヴィ
オを保護する気は無いぞ」

「なら！なんで！」

「簡単だ・・・戦うためさ・・・」

「変わったね・・・焰真」

え？俺が戦いたいみたいな感じになってませんか？
・・・まあいいか

「さうて久しぶりのフェイトとの戦い・・・七騎士、神童焰真負けるわけにはいかん」

「・・・私だつて・・・負けないよ！焰真！」

「戦いたいんだけどな・・・」

「どうしたの？焰真？降参するの？」

・・・けつこうなあゝめんどくさいって言うか
俺の戦う理由が不明なんだが・・・

「なあゝフェイト皆に伝えといてくれ・・・また戻るつてな」

「え？戻ってくるの！？」

「七騎士はやめないが・・・一時戻る予定だ・・・今はすぐに終わらせる」

「負けないよ・・・」

六課には一旦戻る予定だ・・・そのうちな

「一撃で決めるぞ！乖離剣エア・・・」

無銘にして最強の剣。エアという名前はギルガメッシュがつけたもので、彼の持つ究極の切り札。剣というより円柱状の刀身を持つ突撃槍のような形状

「天地乖離^{エヌマ}す開闢^{エリシュ}の星！」

かつて混沌とした世界から天地を分けた究極の一撃。彼が「乖離剣エア」と呼ぶ、無銘にして究極の剣から放たれる空間切断。風の

断層は擬似的な時空断層までも生み出す

ドゴォー――ン！

「フェイト……皆によろしくな……」

・
七騎士VS六課……グランツの短気な性格が招く最悪の戦い……

どうなるのだろうか……

六課に戻る焰間 七騎士の仕事も同時に……出来るのだろうか
次回は戦闘終了後……六課からの始まり

十六話 天空両断之太刀（後書き）

焰真「最低な展開だな・・・」

作者「・・・自分でも分からなくなってきたw」

焰真「天地乖離す開闢の星！」

作者「やめてえええええ！」

焰真「どうしようもないダメ人間だ・・・」

作者「すいません><・・・それでは！」

作者「皆様からの評価・感想待ってます！m - - m」

作者「駄文ですが・・・次回もよろしくです」

第一章 第零話 新たなる物語（前書き）

七騎士VS六課と戦いから・・・一ヶ月後の物語

第一章 第零話 新たなる物語

機動六課VS七騎士の戦いから・・・一ヶ月

七騎士の一人、神童焰真は六課解散後フェイト・T・ハラオウンの補佐官の仕事へ

七騎士の仕事もこなしながら補佐官をしている焰真

六課解散後、皆をも会う機会が無く・・・

今現在もフェイトと破壊できなかったガジェット達と戦闘中

「チッ！ドラグーンキャノン！」

ドラグーンモード中二つの銃から放たれる巨大なエネルギーの塊

「瞬刀〱風〱霸王九閃！」

ドゴオーン！

（焰真！そっちはどう？）

（まあまあだ・・・）

ガジェットの数は多くないが・・・何故か前より強くなっている
何故だ？

「風神一閃！！」

風の斬撃を飛ばして・・・最後だな

「全滅かな・・・終わるか」

ガジェットは全滅、フエイトのほうも終わったようで・・・

「焰真くお疲れ様」

「ああ・・・そっこそ、お疲れ様」

なんとなく頭を撫でてみると・・・

「えへへ（／／／）」

いつも通りの反応だな・・・19歳なのか？

「さて・・・帰るか」

「うん」

「なあ・・・フェイトやつぱ部屋を別にしてもらおう」

「えゝ決まったことだからさ・・・それにゴニョゴニョ（／／／）

」

何故か同じ部屋なんだよな・・・違う！作者に言え！俺に石を投げなっ！

・・・仕事も多いせいか、寮みたいな感じになってる・・・

「寝るか・・・」

「おやすみなさい」

新たな物語・・・焰真達に待ち受ける・・・新たな敵
焰真達は乗り越えることが出来るだろうか・・・

第一章 第零話 新たなる物語（後書き）

作者「m - - m」

焰真「急展開にも程があるだろ・・・」

作者「短い＋更新遅くて申し訳ない・・・」

焰真「現実逃避の受験生が・・・」

作者「えへっ」

焰真「・・・・・・・・」

作者「そ、それでは！」

作者「皆様からの評価・感想待ってます！m - - m」

作者「駄文ですが・・・次回もよろしくです」

第一章 第一話 騎士戦争（前書き）

更新遅れました><宿題やら受験勉強やら・・・orz

騎士の力を持っている焰真
その力が手にした以上・・・騎士戦争からは・・・逃れられない運命

第一章 第一話 騎士戦争

「機動六課が！？・・・ってことあ皆とか？」

「うん、また皆といっしょに仕事出来るね」

・・・忙しくなりそうだな・・・仕事増えるのか

「最近騎士達の襲撃が多いな・・・」

「そうだね・・・」

六課解散後、騎士達の襲撃が多い

今のところ、もの凄く強い奴が居なかったが、平均的に騎士は強い

（我が主、反応あります・・・騎士です）

（はぁ・・・行くか）

「フェイト・・・騎士だ行って来る」

「一人で大丈夫？」

「ああ・・・」

ほとんど一人で騎士との戦闘を行っている焰真

騎士との戦闘は騎士の力で行ったほうが楽だからだ・・・

「・・・あれだよな・・・たぶん」

200mぐらい先で飛んでいる、赤い大きな鎧で斧を持っている
騎士

何もせず仁王立ちしてる・・・バカか？

「古より煌く 聖なる騎士 グラディウス
我に力を・・・」

騎士に変身して・・・いざ！

「集え！剣よ！グラディウスアーツ！」

不意に12本の剣を飛ばしてみる・・・が

「甘いはあ！火炎撃落！」

炎を纏った斧を振りおろして・・・剣を破壊した・・・

「さすがに終わらないか・・・」

「貴様が噂の騎士か！この俺が倒してやる！ははは！」

（熱血キャラ苦手です・・・）

（マスタ〜めんどくさいの嫌い）

（我が主・・・死亡フラグ出してるので・・・終わらせましょ）

（お前ら・・・相手が可哀想だろ）

「火炎撃落！ぬおおおお！」

「煌光聖破斬！」

「！？ぬわあああ！」

ドゴォー——ン！

「……雑魚キャラだったのか!？」

(熱血キャラ・・・乙です)

(マスタ) 帰ろうよ

（・・・時間の無駄でしたね・・・我が主）

「リ・ボーン
復活!!!」

(
(
(
なに!
(?
(
(
(

復活した赤い鎧の大男は・・・髪の毛が燃えている？何か違うよ
うな気がするが・・・

・
・
・
冷静キャラに
・
・
・

「行くぜええええ!!」

・
・
・
な
つ
て
な
か
つ
た
か

「煌け！我が剣よ！天をも斬り裂く！光の剣！」

「火王爆落撃!!」
エターナルパラディン・ノヴァ
煌く騎士の天光!」

剣から伸びる巨大な光の剣で相手を斬り裂く……

「バカなああああああ！」

（熱血雑魚キャラ乙です・・・）

（マスタ〜なんか疲れたよ）

（我が主・・・疲れました）

皆酷くない！？・・・敵さん頑張ってたのに・・・

「帰るか・・・」

無駄に力を使ってしまったので・・・家に帰って寝ることにした

「ふう〜疲れた・・・明日は休みだったかな」

（残念ですが・・・七騎士の会議があります。）

（・・・休みが最近少ないな・・・）

「・・・寝るか」

騎士達の襲撃・・・騎士戦争の始まり・・・機動六課の再始動
いろいろあった一日だった・・・

第一章 第一話 騎士戦争（後書き）

焰真「逝ってらっしやい！」

作者「更新遅れた＋短くてすいませんでしたああああ！」

焰真「現実逃避の受験生がああああ！何してたんだ！」

作者「新しい小説とか・・・考えてた」

焰真「・・・・・・」

作者「・・・・・・てへっ」

焰真「・・・・・・ダメ人間すぎて・・・・言葉を失うよ」

作者「えっへん」

焰真「逝ってらっしやい^^」

作者「やめてええええええええ！」

作者「恐ろしい主人公だ・・・・それでは！」

作者「更新遅れて、申し訳ありませんでしたm - - m」

作者「皆様の評価・感想など待ってますm - - m」

作者「駄文すぎて困りますが・・・・次回もよろしくです」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3142m/>

魔法少女リリカルなのはStrikerS ~ 煌きの幻想 ~

2010年10月13日15時47分発行